

PAT-NO: JP363276672A  
DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 63276672 A  
TITLE: INTELLIGENT WORK STATION  
PUBN-DATE: November 14, 1988

**INVENTOR-INFORMATION:**

NAME	COUNTRY
NOMURA, NORIMASA	
ABE, SHOZO	

**ASSIGNEE-INFORMATION:**

NAME	COUNTRY
TOSHIBA CORP N/A	

APPL-NO: JP62056739  
APPL-DATE: March 13, 1987

INT-CL (IPC): G06F015/62 , G06F015/20

**ABSTRACT:**

PURPOSE: To effectively understand contents and to form picture data which can be supplemented by analyzing a character string between instructed sentence blocks, extracting sentence information between the sentence blocks, forming and displaying an animation picture according to the extracted sentence information.

CONSTITUTION: At the time of the input of sentence data or the designation of the sentence data (A), the character string of the sentence data is displayed on a display (B). At the time of designating (C) the sentence punctuation for forming the animation picture to the displayed sentence data, the character string between the sentence punctuation is analyzed to extract the sentence information required for forming the animation according to the extracted sentence information (D, E). Then, according to the extracted sentence information, the animation is formed (F), the

picture is displayed (G), the data is associated with the sentence data and stored. Thereby, the element of a display graphic supplied from a data base varied according to the sentence information, numerical data or a time relation thereof and the animation picture in which the contents of the sentence data can be visually impressed is formed.

COPYRIGHT: (C)1988, JPO&Japio

## ⑫ 公開特許公報(A)

昭63-276672

⑮ Int. Cl.<sup>4</sup>G 06 F 15/62  
15/20

識別記号

3 0 1

庁内整理番号

6615-5B  
Z-7218-5B

④ 公開 昭和63年(1988)11月14日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全 44 頁)

⑭ 発明の名称 知的ワークステーション

⑰ 特 願 昭62-56739

⑱ 出 願 昭62(1987)3月13日

⑲ 発 明 者 野 村 典 正 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株式会社東芝総合  
研究所内⑲ 発 明 者 阿 部 省 三 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株式会社東芝総合  
研究所内

⑲ 出 願 人 株 式 会 社 東 芝 神奈川県川崎市幸区堀川町72番地

⑲ 代 理 人 弁 理 士 鈴 江 武 彦 外 2 名

## 明 細 書

## 1. 発明の名称

知的ワークステーション

## 2. 特許請求の範囲

(1) 表示装置に文章データを文字列として表示させる手段と、表示された文章データ中の特定の文章区間を指示する手段と、指示された文章区間の文字列を解析して該文章区間の文章情報を抽出する手段と、抽出された文章情報に従って動画像を生成して表示する手段と、この動画像の情報を記憶する手段とを具備したことを特徴とする知的ワークステーション。

(2) 文章区間の指定は、複数の文章区間の指定とそのリンク関係を指定して行われるものである特許請求の範囲第1項記載の知的ワークステーション。

(3) 文章情報の抽出は、指定された文章区間の文字列を構文解析して文章の主体、主題、数値データ、時間的関係の情報をそれぞれ抽出して行われるものである特許請求の範囲第1項記載の知的ワ

ークステーション。

(4) 動画像の生成は、数値データの変化とその時間的関係に従って表示図形の情報を変化させて行われるものである特許請求の範囲第1項記載の知的ワークステーション。

## 3. 発明の詳細な説明

## 〔発明の目的〕

(産業上の利用分野)

本発明は、出力文章データの内容把握を容易ならしめる知的ワークステーションに関する。

(従来技術)

ワークステーションが持つ重要な処理機能の1つに、種々の文章データの呈示がある。例えば表示装置を用いて文章データを文字列として表示したり、或いは音声合成機能を用いて文章データを音声出力することが行われる。

ところでワークステーションから、例えば説明文等の文章データが呈示されても、その内容、具体的には文章内容が示す数値データを容易に理解することができない場合がある。このような場合

には、一般的にその数値データをグラフ化（図式化）して表示することで、その内容理解を補助することが良く行われる。

ところが従来システムにおける文章データからの図形データの作成は、一般的にグラフや対照表を、静止画として作成しているだけである。この為、例えば数値の時間的な経緯に伴う変化の状況等を容易に把握するには甚だ不十分であった。

（発明が解決しようとする問題点）

このように従来のワークステーションにおいては、文章データの理解を助ける為のグラフ等の図形情報を上記文章データを解析して静止画として作成しているものの、その静止画からだけでは上記文章データの内容理解が十分に補助されないことがある等の問題があった。

本発明はこのような事情を考慮してなされたもので、その目的とするところは、文章データを解析してその内容理解を効果的に補助することのできる画像データを作成することのできる知的ワークステーションを提供することにある。

— 3 —

作成するようにしたものである。

（作用）

本発明によれば、文章データを解析して求められる文章情報から各種の数値データやこれらの数値データを対応付ける、例えば主体や時間的関係の情報が抽出される。そしてこれらの情報に基づいてデータベースから与えられる図形要素の変形処理が行われて、例えば数値データの時間的推移を表現する動画が作成されて表示される。

従ってこの動画によれば、例えば数値データが急激に変化したか、或いは緩慢に変化したか等の情報を容易に呈示することが可能となり、前記文章データの内容理解を極めて効果的に助けることが可能となる。つまり静止画により固定的に数値データの変化を示すものと異なり、動画によって上記数値データの変化を時間的な経緯を伴う変化として表現することが可能となるので、文章データの内容を適確に表現してその内容理解を効果的に助けることが可能となる。

（実施例）

— 5 —

【発明の構成】

本発明は、第1図にその概念を示すように文章データの入力、或いは文章データの指定があったとき（処理A）、その文章データの文字列をディスプレイ表示する（処理B）。そしてこの表示文章データに対して動画を作成する為の文章区間が指定されたとき（処理C）、その文章区間の文字列を解析して動画を作成するに必要な文章情報を抽出する（処理D、E）。そしてこの抽出文章情報に従って動画を作成し（処理F）、その動画を表示すると共に（処理G）、その動画データを前記文章データに関連付けて記憶するようにしたものである。

つまり文章データの指定された特定区間の文字列を解析してその文章情報を、例えば主体、主題、数値データ、時間的関係等を抽出し、例えばデータベースから与えられる表示図形の要素を上記文章情報に応じて、特に数値データやその時間的関係に応じて可変処理する等して、前記文章データの内容を視覚的に印象付けることのできる動画を

— 4 —

以下、図面を参照して本発明の実施例につき説明する。

第2図は本発明の実施例に係る知的ワークステーションの概略構成図である。この知的ワークステーションは、以下の各部を備えて構成される。

バス1；以下に説明する各部の間で必要な情報転送を行なう為に用いられる。

制御部2；マイクロプロセッサを主体として構成され、該知的ワークステーションの各部の動作をそれぞれ制御するものである。

イメージ入力装置3；カメラやスキャナ、或いはOCR等からなり、各種のイメージ情報を入力する。

位置座標入力装置4；タブレットやマウス等からなり、指定された位置座標情報を入力する。

音声入力部5；マイクロフォン等により構成され、音声情報を入力する。

キーボード部6；複数のキーを備え、文字・記号コードや制御コード等を入力する為のものである。

— 6 —

ICカード部7；後述するようにICカードが装荷され、該ICカードとの間で必要な情報を入力出力するものである。

バスコントローラ8；バス1を介する各部間の情報転送を制御する。

音声出力部9；スピーカ等からなり、音声情報を出力する。

ディスプレイ部10；CRTディスプレイや液晶ディスプレイ等からなり、文字・図形・画像等を表示する。

イメージ出力装置11；FAXやカラープリンタ等からなり、種々のイメージ情報をプリント出力する。

通信装置12、13；該ワークステーションと電話機、或いは遠隔地に設置された他のワークステーションや端末等との情報通信を行なう。

切換え装置14；複数の通信装置を切換え使用する。

タイマー部15；該ワークステーションに時刻情報や時間情報を提供する。

— 7 —

生成する。

イメージ合成部27；複数のイメージ情報を合成処理したり、処理データに従ってイメージの編集処理を実行する。

図形合成処理部28；種々の図形を合成処理したり、処理データに従って図形の加入・削除等の編集処理を実行する。

音声の圧縮・伸長部29；音声データを圧縮符号化したり、圧縮された音声データの復元伸長を行なう。

イメージの圧縮・伸長部30；イメージ・データを圧縮符号化したり、圧縮されたイメージ・データの復元伸長を行なう。

信号処理部31；種々の信号情報の符号化圧縮やその復元伸長、必要な情報の付加等の一連の信号処理を実行する。

データベース部32；種々の情報を複数のリレーションにそれぞれ分類し、データベースとして蓄積する。尚、このデータベースはコード情報のみならず、イメージや音声等としても構築される。

— 9 —

暗号化処理部16；種々の情報を暗号化処理する。

音声照合部17；与えられた音声情報が特定の音声であるか否かを照合処理する。

イメージ照合部18；与えられたイメージ情報が特定のイメージであるか否かを照合処理する。

音声認識部19；与えられた音声情報を認識処理する。

音声分析部20；音声入力部5等から入力された音声の特徴を抽出する等して該音声を分析処理する。

文字認識部21；前記イメージ入力装置3等から入力された文字・記号パターンを認識処理する。

イメージ認識部23；前記イメージ入力装置3等から入力された図形イメージ等を認識処理する。

出力形態選択部24；該ワークステーションから出力する情報の形態を選択制御する。

作業環境データ収集部25；該ワークステーションの機能状態や、それによるオフィス内の作業環境等の情報を収集入力する。

音声合成部26；処理データに従って合成音声を

— 8 —

本発明に係る知的ワークステーションは、基本的には上述した各部を備えて構成され、上述した各部がそれぞれが持つ機能を有効に利用して全体的にインテリジェンスな機能を呈するものとなっている。

次に前述したキーボード部5等のように一般的ではなく、この知的ワークステーションにおいて特徴的な機能を呈するICカード部7や暗号化処理部16等について更に詳しく説明する。

先ずICカードは、例えば第3図に示すように名刺大の大きさのカード本体7a内にマイクロプロセッサやメモリ回路等の半導体回路を内蔵し、カードの一端部に上述した構成の知的ワークステーション本体に接続する為のインターフェース部7b、および表示窓部7cを設けて構成される。

尚、表示窓部7cは透明偏光体を埋め込んで形成されるもので、その位置はインターフェース部7bや半導体回路と乗疊しない位置に設定される。またカード本体7aは、上記表示窓部7cに対応する部分のみが透明であっても良く、またその基板全体

— 10 —

が透明なものであっても良い。

しかしてICカードは、具体的には第4図にその分解斜視図を示すように、一対のカバー基板7d、7e、これらのカバー基板7d、7eに挟持される埋め込み基板7f、コアシート材7g、プリント基板7hを一体的に熱圧着して構成される。

このプリント基板7hの前記インターフェース部7bに対向する位置には入出力端子7iが設けられ、また表示窓部7cに対向する位置には液晶表示装置7jが設けられる。更にはプリント基板7hには半導体集積回路7kが設けられる。またカバー基板7eには前記プリント基板7hにおける発熱を発散する為の金属箔7mが設けられる。

尚、カバー基板7d、7eや埋め込み基板7f、コアシート材7gにそれぞれ穿たれた孔部はプリント基板7hに集積された半導体集積回路7j等にそれぞれ対向する位置に設けられたものである。これらの孔部に上記半導体集積回路7k等を嵌合させて前記カバー基板7d、7e、埋め込み基板7f、コアシート材7g、プリント基板7hが積層一体化されてICカ

— 1 1 —

は、例えば高分子フィルムを用いたシート状の電池として組込むようにすれば良い。

しかして前記半導体集積回路7kは、例えば第6図に示すようにCPU7pや、データ・メモリであるPROM7q、E<sup>2</sup>PROM7r、およびこれらのメモリに対する選択部7s等を備えて構成される。PROM7qは消去・書替え不可能な大容量の不揮発性メモリであり、前記CPU7pに対する制御プログラムや、永久記録すべき情報等を格納している。またE<sup>2</sup>PROM7rは書替え可能な小容量の不揮発性メモリであり、例えば情報の取引番号や、情報取引時に用いられる番号、およびその使用時に更新される情報が格納される。

これらのメモリは前記選択部7sの制御により選択的に駆動され、前記CPU7pとの間で情報の入出力を行なう。CPU7pはこれらのメモリを用いて必要な情報処理を実行し、またそのインターフェース部から前述した端子部7iを介して知的ワークステーション本体との間で情報の入出力を行なう。

— 1 3 —

ードが構成される。そして入出力端子7iは、カバー基板7dに穿たれた孔部を介して露出し、ワークステーション本体に電気的に接続されるインターフェース部7bを構成する。

尚、前記液晶表示装置7jは、例えば第5図にプリント基板7k部の断面構造を示すように、スペーサを介して設けられた一対のポリエーテルサルフォンフィルム基板の間に液晶層を挟持し、該フィルム基板の内側面に透明導電膜をそれぞれ形成すると共に、下面側のフィルム基板に偏光体や反射体を設けて構成される。このようにポリエーテルサルフォンフィルム基板を用いて液晶表示装置7jを構成すれば、その厚みを0.6μm以下にすることも容易であり、ガラス基板を用いて液晶表示装置を構成する場合に比較してICカード自体を薄くすることができる。

またこのICカードの駆動電源については、前記インターフェース部7bを介してワークステーション本体側から供給するようにしても良いが、カード内に内蔵するようにしても良い。この場合に

— 1 2 —

前記ICカード部7は、このようなICカードを装着し、該ICカードとの間で情報の入出力を行なうことになる。

尚、ICカードは上述した構成に限定されるものでないことは勿論のことであり、その構成に応じてICカード部7が構成されることも云うまでもない。

次に暗号化処理部16について説明する。

この暗号化処理部16は、例えば第7図に示すように暗号化部16a、復号化部16b、秘密鍵ファイル部16c、公開鍵ファイル部16d、そして鍵更新部16eを備えて構成される。

そして第8図にその概念を示すように、与えられた通信原文を暗号鍵に従って暗号化してその暗号通信文を生成したり、また逆に与えられた暗号通信文を暗号鍵に従って復号してその原文を求める処理を実行する。

秘密鍵ファイル部16cおよび公開鍵ファイル部16dはこの暗号・復号化に用いられる鍵を記憶するものであり、鍵更新部16eはこれらのファイル

— 1 4 —

された鍵の更新を司る。

ここで秘密鍵は、この暗号化処理部16を所有するワークステーションのみが知る鍵であり、他のワークステーション等に対しては秘密にされる。これに対して公開鍵は各ワークステーションに設定された各秘密鍵とそれぞれ対をなすものであり、他のワークステーションにそれぞれ与えられて公開される。公開鍵ファイル部16dは、これらの複数のワークステーションがそれぞれ公開した公開鍵を、各ワークステーションに対応して記憶するものである。

暗号化部16aは第9図に示すように、RSA処理部16iと暗号化種別付加部16jとを備えて構成される。そして通信原文を暗号化して情報通信しようとするとき、その通信相手先のワークステーションが公開した公開鍵を用いて通信原文を暗号化し、その暗号通信文に暗号の種別を示す情報を付加して通信情報を作成し、これを通信するものとなっている。尚、暗号の種別の情報は、例えば“0”で暗号化していないこと、また“1”で暗

— 15 —

尚、RSA処理部16i, 16qは、例えば第11図に示すようにブロック分割部16sとべき乗・剰余計算部16t、およびブロック連結部16uとを備えて構成される。

ここでブロック分割部16sは与えられた信号系列を一定の長さのブロック $M_1$ に分割するものであり、べき乗・剰余計算部16tは各ブロック $M_1$ 毎に暗号化の鍵 $k$ を用いて

$$N_1 = M_1^k \pmod{n}$$

なる信号系列 $N_1$ を求めている。但し、 $n$ は固定の値である。この信号系列 $N_1$ がブロック連結部16uを介して順に連結されて出力される。

暗号化処理にあっては、上記信号系列 $M_1$ が通信原文であり、この通信原文から暗号化された通信文が信号系列 $N_1$ として求められる。また復号化処理にあっては上記信号系列 $M_1$ が暗号化通信文であり、この暗号化通信文から復号化された通信原文が信号系列 $N_1$ として求められる。

このような暗号化・復号化を担う鍵 $k$ が前述した公開鍵と秘密鍵であり、これらは対をなして設

— 17 —

号化していることを示す情報や、暗号方式を示す情報等からなる。

また復号化部16bは、自己ワークステーションが公開した公開鍵を用いて或るワークステーションが暗号化して通信してきた暗号通信文を入力し、これを上記秘密鍵に対応した秘密鍵を用いて復号化するものであり、第10図に示すように暗号文分割部16k、暗号種別判定部16m、切換え部16n, 16p、RSA処理部16qを備えて構成される。

暗号文分割部16kは、前述したフォーマットで通信されてきた通信情報を前述した暗号種別の情報と暗号化通信文とに分割するものであり、暗号種別判定部16mは該暗号種別情報からその通信文が暗号化されているか否かを判別している。そして暗号化されていない場合にはその通信文を切換え部16n, 16pを介して出力し、暗号化されている場合にはその通信文をRSA処理部16qに導いている。このRSA処理部16qにて前記秘密鍵を用いて暗号化通信文が復号化処理され、上記切換え部16pを介して出力される。

— 16 —

定される。

従ってワークステーションは、他のワークステーションから公開された公開鍵に従って通信情報をそれぞれ暗号化することはできるが、その暗号化された通信文を復号化し得るのは、その公開鍵と対をなす秘密鍵を知り得る特定のワークステーションだけとなる。これ故、或る情報を暗号化して通信しようとするワークステーションは、通信相手先のワークステーションが公開した公開鍵に従って該通信原文を暗号化して通信する。そしてその通信情報は、秘密鍵を持つ通信相手先のワークステーションのみが復号し得るものとなっている。

尚、他のワークステーションがそれぞれ公開した公開鍵の全てを公開鍵ファイル16dに格納しておく必要はない。例えばシステムに対して別に設けられた公開鍵ファイル・メモリに、各ワークステーションが公開した公開鍵を各ワークステーションに対応させてファイルしておく。そして情報通信が必要となったとき、その通信相手先の公開

— 18 —

鍵を上記公開鍵ファイル・メモリから読出して自己のワークステーションの公開鍵ファイル部16に格納するようにしても良い。

以上が暗号化処理部16の基本的な構成とその機能である。

次にイメージ照合部18について説明する。

このイメージ照合部18は、前記イメージ入力装置3から入力されたイメージ情報、例えば個人の顔のイメージを入力し、その個人同定を行なうものである。

第12図はこのイメージ照合部の概略構成を示すもので、18aはイメージ記憶部、18bは正規化回路、18cは2値化(細線化)回路、18dは特徴データ抽出回路である。また18eはイメージデータを記憶したデータ記憶部であり、18fは検索回路、18gは照合回路、そして18hは出力部である。

イメージ記憶部18aは前記イメージ入力装置3を介して入力されたイメージ情報を記憶し、そのイメージ照合処理に供するものである。このイメージ記憶部18aに記憶されたイメージ情報に対し

- 19 -

例えば第14図に示すように登録されている。即ち、各個人毎にその個人名を識別名として上述した顔のイメージの特徴データが登録され、且つその顔のイメージ・データがポイントによって結ばれている。

検索回路18fは前記特徴データ抽出回路18dにて抽出された特徴データに基づいて該データ記憶部18eを検索している。そしてその検索データは照合回路18gに与えられ、前記特徴データ抽出回路18dで求められた特徴データと照合処理されている。

この照合処理は、例えば前記特徴データ抽出回路18dで求められた入力イメージの特徴データを $X_i$  ( $i$ は特徴の種類)、データ記憶部18eに登録されているイメージの特徴データを $Y_i$ としたとき、

$$D = \sum_i |X_i - Y_i|$$

なる演算を行い、その演算結果 $D$ の値が最も小さいものを、その個人として同定することによって

- 21 -

て正規化回路18bは正規化処理し、また2値化回路18cは2値化処理する。具体的には、ここでは個人の顔のイメージからその個人同定を行なうべく、正規化回路18bはその顔の大きさを正規化している。この正規化された顔のイメージに対して2値化回路18cは、例えばエッジ線分検出、そのエッジ線分の細線化処理等を行なって該イメージの2値画像を求めている。

特徴データ抽出回路18dは、このようにして正規化・2値化されたイメージ情報からその特徴データを抽出するものである。即ち、顔のイメージによる照合処理にあつては、例えば第13図に示すように顔の輪郭を1つの特徴として抽出し、更にそのイメージ中の目、鼻、口等の特徴を抽出している。具体的には、顔の輪郭的特徴を分類されたコード情報として、また両眼間の距離 $l$ 、口の大きさ $m$ 、目と口との距離 $n$ 等を数値データとしてそのイメージの特徴として抽出している。

しかしてデータ記憶部18eには、予め各個人について求められた顔のイメージの特徴データが、

- 20 -

行われる。この同定結果が出力部18hを介して出力される。

イメージ照合部18は、基本的にはこのようにして入力イメージを照合処理し、例えば該入力イメージの個人同定等を行なう。

次に音声認識部19について説明する。

音声認識部19は、例えば第15図に示すように構成される。音声入力回路19aは、前記音声入力部5から入力された音声信号、または公衆電話回線を介して前記通信装置12、13にて受信された音声信号を入力するもので、この入力音声信号を適当な信号レベルに増幅する増幅器や、帯域制限用のバンドパスフィルタおよびA/D変換器等によって構成される。入力音声はこの音声入力回路19aにて、例えば30~3400Hzの周波数帯域の信号に制限され、12KHzのサンプリング周期で12ビットのデジタル信号に量子化される。

音響処理部19bは、例えば専用のハードウェアにより構成された積和回路からなる。そして基本的には前記音声入力回路19aと同期してパイプラ

- 22 -



イン的に高速動作する。

ここでの音響処理は、2種のバンドパスフィルタ群により実行される。その1つは16チャンネルのフィルタバンクで、このフィルタバンクを介して入力音声信号のスペクトルの変化が抽出される。今1つは、同じ帯域を4チャンネルに分割したグロスフィルタであり、このグロスフィルタを介して入力音声の音響的特徴が抽出される。

これらの2種類のフィルタ群（フィルタバンクとグロスフィルタ）は、例えば4次巡回形のデジタルフィルタとして構成される。そして、例えば10msec毎にそのフィルタリング出力を求めるものとなっている。尚、この音響処理部の制御はマイクロプログラム方式にて行われる。

しかして前処理・認識部19cは、高速プロセッサ19d、パターンマッチング処理部19e、単語辞書メモリ19f、およびバッファメモリ19gによって構成される。

バッファメモリ19gは上記音響処理部19bにてフィルタリング処理された音声信号を入力し、例

- 23 -

$E_{\theta}$ を一定時間以上継続して越えたとき、該閾値 $E_{\theta}$ を越えた時点が音声単語の始端Sとして検出している。その後、上記入力音声信号のレベルが上記閾値 $E_{\theta}$ を一定時間以上継続して下回ったとき、該閾値 $E_{\theta}$ を下回った時点が音声単語の終端Eとして検出している。

ところで音声認識はパターン認識の一種として考え得る。しかし音声特有のパターン変動や、話者の性別・発声器官の形状・発声法等に起因する個人差、また話者自身が発生する雑音や周囲環境の雑音、更には電話音声の場合には公衆電話回線を経由したことによるレベル差や雑音の問題がある。この為、これらを考慮し、上述した変動要素を吸収して、如何に精度良く、安定に音声認識するか問題となる。

そこでこの前処理・認識部19cではパターンマッチング法と構造解析法とを2段階に組合せ、ハイブリッド構造マッチング法と称される認識法を採用している。

即ち、上述したように単語音声区間が検出され

- 25 -

えば最大1.8秒分の音声データを蓄積するものとなっている。高速プロセッサ19dはこのバッファメモリ19gに格納されたデータに対して、音声区間検出、リサンプリング、ラベリング、遷移ネットワークによる認識処理、およびその総合論理判定処理の実行を行なっている。またこの高速プロセッサ19dにより、ホスト計算機との間の通信や該音声認識部19全体の動作制御が行われる。

この高速プロセッサ19dにて処理された音声データについて、パターンマッチング処理部19eは単語辞書メモリ19fに登録された単語音声の標準パターンデータとの間で複合類似度計算等のマッチング処理を実行し、その認識候補を求めている。

例えば認識対象となる音声単語は離散的に発声される。そこで高速プロセッサ19dは、例えば音響処理の際に10msec毎に計算される入力音声エネルギーを用いて単語音声の入力区間を検出している。

具体的には第16図に示すように、背景雑音レベルと入力音声レベルとから適応的に計算される閾値 $E_{\theta}$ を用い、入力音声信号レベルが上記閾値

- 24 -

ると、先ずその音声区間(S, E)を15等分し、その16点をそれぞれリサンプル点とする。そして前述した如く音響処理された16チャンネルの音声データ(スペクトル時系列)から上記各リサンプル点でのスペクトルを抽出する。尚、音声データのサンプル点と上記リサンプル点との間でずれがある場合には、リサンプル点の最近傍点のスペクトルを抽出すれば良い。

このリサンプル処理によって例えば $16 \times 16 (= 256)$ 次元の音声パターン・ベクトルXを求める。即ち、第j(j=1,2,3,...,16)番目のリサンプル点を $r_j$ とすると、 $r_j$ での16チャンネルのスペクトルデータを

$$S_{rj} = (S_{1rj}, S_{2rj}, \dots, S_{16rj})$$

としてそれぞれ求め、これらの $S_{1rj}$ を並べ換えて

$$X = (S_{1r1}, S_{1r2}, \dots, S_{2r1}, \dots, S_{16r16})^t$$

なる音声パターン・ベクトルXを求める。但し、 $t$ は行列の転置を示す。

このようにして求められた入力音声パターンベ

- 26 -

クトル $X$ と、単語辞書メモリ19fに予め登録された単語音声の標準パターンとの類似度が、例えば複合類似度法によって計算される。

ここで単語辞書メモリ19fに予め登録された単語音声の標準パターンは、その単語カテゴリ $\omega_k$ について、

$$(\phi_{1k}, \phi_{2k}, \sim \phi_{Lk})$$

$$(\lambda_{1k}, \lambda_{2k}, \sim \lambda_{Lk})$$

但し、

$$(\lambda_{1k} \geq \lambda_{2k} \geq \sim \geq \lambda_{Lk})$$

として準備されている。尚、 $\phi_{jk}$ ,  $\lambda_{jk}$ はカテゴリ $\omega_k$ に属するパターンベクトル $X$ の共分散行列 $K$ における固有ベクトルとその固有値である。このような単語辞書について、上述した複合類似度 $S(k)$ は

$$S(k) = \frac{\sum_{i=1}^L \lambda_{ik} \cdot (X, \phi_{ik})^2}{\lambda_1 \cdot \|X\|^2}$$

として計算される。尚、上式において $\|X\|$ はベクトル $X$ のノルムである。

— 27 —

6種類からなる。この際、音楽辞書は、男声と女声に分けてそれぞれ準備しておく方が望ましい。

ここで比較的安定に発音されるの母音に比べ、子音を音楽として個々にラベル付けすることが困難である。従ってその子音についてはその音響的な特徴をラベル付けし、これを特徴情報とする。具体的には、音響処理で求められる4チャンネルのグロスフィルタの出力と音声エネルギーとから音響的特徴を抽出する。このようにして特徴抽出されてラベル付けされる音響的特徴は、例えば第17図にグロスフィルタの出力の特徴と対比して示すように、無音性、無声性、摩擦性、破裂性、エネルギー・ディップ等の12種類からなる。

しかして入力音声について求められた音楽・音響ラベル系列は、前記音声期間 $(S, E)$ を含む範囲に亘って、各単語カテゴリ毎に作られた、例えば第18図に示す如き遷移ネットワークに入力される。

この遷移ネットワークの各ノード毎に、指定された音楽ラベルや音響的特徴の有無をチェックす

— 29 —

このような複合類似度計算が全てのカテゴリについてそれぞれ行われ、上位に位置する類似度値と、それを得たカテゴリ名とが対にして求められる。

このような複合類似度法によるパターンマッチングによって、多くのパターン変動を救出した認識処理が可能となる。しかし類似パターンや雑音が加わったパターンでは、異なるカテゴリ間でその類似度値の差が小さくなることがある。

そこで前述したようにパターンマッチング法を補うものとして、以下の構造解析の手法を導入している。この構造解析は、単語音声を構成する音の違いに着目して認識処理するもので、音楽ラベル系列と音響的特徴系列の2つの時系列を利用している。

即ち、音楽ラベル系列は、入力音声信号から10 msec毎に計算される16チャンネルのスペクトルを用いて音楽辞書との類似度を計算し、一定値以上の類似度を持つ音楽のラベル付けして求める。尚、この音楽ラベルは、例えば5つの母音と鼻音との

— 28 —

る。そして無であればリジェクト、有であれば次のノードに遷移させ、その特徴系列が終了した時点で遷移ネットワークのゴールに到達した入力系列を受理し、そのカテゴリを求める。尚、系列のチェックの方向は、ネットワーク毎にその正逆を選択可能なものである。

総合判定論理は、前述した如くパターンマッチングによって順序付けられた候補カテゴリと、遷移ネットワークにより求められた認識結果とを総合して、その最終判定を行なうロジックである。

即ち、この総合判定論理は、パターンマッチングで求められた最大類似度を $S_1$ としたとき、これを所定の閾値 $\theta$ と比較する。そして $(S_1 < \theta)$ の場合、これを雑音としてリジェクトする。

また $(S_1 \geq \theta)$ の場合には、別の閾値 $\Delta\theta$ を用いて $(S_1 - \Delta\theta)$ 以上の類似度を持つカテゴリを候補として抽出する。そしてその抽出されたカテゴリの数 $n$ が1つである場合、これを認識結果として抽出する。また複数のカテゴリが抽出された場合には、前記遷移ネットワークによる解析

— 30 —

結果を参照し、遷移ネットワークで受理されたカテゴリのみを抽出する。そしてその中で最大の類似度を持つカテゴリを認識結果として求める。

尚、閾値処理によって抽出されたカテゴリの中に、遷移ネットワークで受理されたものが含まれない場合には、判定不能とする。

以上のようにして複合類似度法によるパターン認識処理結果と、遷移ネットワークを用いた認識結果とを統合してその入力単語音声の認識が行われる。

第19図はこの音声認識部における単語音声の認識処理手続きの流れを示すもので、音声区間検出処理の後、リサンプル処理してパターンマッチングを行い、同時にラベリング処理して遷移ネットワークによるチェックを行い、しかる後、これらの各認識結果を統合してその総合判定論理処理を行なうことが示される。このような処理が前記高速プロセッサ19dによる処理シーケンスの下で実行される。

ところで離散的に発声された単語音声ではなく、

— 3 1 —

性の高い部分区間の境界を求め、その境界によって区切られた部分区間の各単語認識結果を求めるようにすれば良い。

然し乍ら、このようにして部分区間を求めて単語類似度計算を行なう場合、部分区間の数が膨大なものとなる為、処理の高速化が妨げられる。従って実際的には処理の高速化を考慮して、例えば入力単語数が2～5単語、1単語の継続時間長が128～640 msec、1回の発声における単語長の比が2.5以下、フレーム周期は16msec (8msec周期で2個に1個の単語を取出す)等の制限を加えて部分区間を検出するようにすれば良い。

このようにすれば連続発声された音声の中の単語をそれぞれ効果的に認識することが可能となる。

ところでこのような音声認識処理に供される辞書(単語辞書)の学習は次のようにして行われる。

この学習処理は、①母音パターンおよび子音パターンからその特性核を求める処理と、②その特性核に対する固有値と固有ベクトルを求める処理とに大別される。そしてこの固有値と固有ベクトル

— 3 3 —

連続発声された音声の中の単語を認識する場合には次のようにすれば良い。即ち、この場合には入力音声を種々の部分区間に分割し、その部分区間毎に単語識別を行なって単語類似度を求めるようにすれば良い。

具体的には、例えば第20図に示すように入力音声区間における全ての分析フレーム間をそれぞれ部分区間の境界候補とし、該入力音声区間を複数の部分区間に分ける。この際、認識対象となる単語の継続時間長については最大時間長 $D_{max}$ と最小時間長 $D_{min}$ が設定できるので、その範囲内の部分区間だけを認識処理対象とすれば良い。

ここで第20図に示す例では、連続発声された音声の単語数が2個の場合を想定して2つの部分区間を求めている。しかし一般的には入力音声の単語数は不明であるから、2単語から $n$ 単語までが単語候補として存在すると仮定して部分区間をそれぞれ検出すれば良い。そして検出された各部分区間について単語類似度の計算を行い、その類似度結果の繋がりに関係を相互に比較して最も信頼

— 3 2 —

度とを、その固有値の大きいものから順に $N$ 個求める。この処理は一般にKL展開と称されるものである。

先ず特性核を求める処理について説明すると、入力音声パターン(学習パターン)の特性核 $K$ は、その学習パターンの縦ベクトルを $S_n$ としたとき、次のようにして求められる。

$$K = (1/N) \sum_{n=1}^N S_n S_n^t$$

$$S_n = (S_{n1}, S_{n2}, \sim S_{nn})^t$$

尚、この学習パターン $S_n$ は、子音パターンの場合には64次元の縦ベクトルとして与えられる。また母音パターンの場合には16次元の縦ベクトルとして与えられる。

しかして特性核 $K$ は $m$ 個の学習パターンについて、その縦ベクトル $S_n$ と、この縦ベクトル $S_n$ を転置した横ベクトル $S_n^t$ とを掛け合わせて作成される行列の各成分を、上記 $m$ 個の学習パターンに互って平均化して求められる。従って特性核の要素数は上記ベクトルの要素数の2乗となる。

— 3 4 —

尚、このような処理によってそのカテゴリのパターン分布を反映した特性核  $K$  を得るには、或る程度の量の学習パターンを必要とする。この為、学習パターン・メモリに予め所定数の学習パターンを蓄積しておくことが必要となる。

ところが母音の場合には16次元で最低 6個のカテゴリの学習パターンを準備するだけで良いが、子音の場合には 101カテゴリも存在し、しかも64次元のデータとして求める必要がある。この為、このままでは膨大なメモリ容量を必要とすることが否めない。

そこで少数の学習パターンによってパターン分布を反映した特性核  $K$  を得るべく、次のような特性核の更新処理を行い、逐次計算によってその特性核を次第にパターン分布を反映した形に改良して行くようにする。

即ち、

$$K = K' + w S_n S_n^t$$

なる演算処理を繰返し実行するようにする。但し、 $w$  は特性核の更新時における重み係数である。こ

— 35 —

して

$$u_0 = \sum_{i=1}^n \alpha_i F_i$$

として表わされる。このとき、

$$K F_i = \lambda_i F_i$$

なる関係が成立することから、

$$\begin{aligned} K^S u_0 &= K^S \left( \sum_{i=1}^n \alpha_i F_i \right) \\ &= K^{S-1} \left( \sum_{i=1}^n \alpha_i \lambda_i F_i \right) \\ &= \dots \dots = \sum_{i=1}^n \alpha_i \lambda_i^S F_i \end{aligned}$$

となる。

ここで

$$|\lambda_1| > |\lambda_2| > \dots > |\lambda_n|$$

$$\begin{aligned} K^S u_0 &= \lambda_1^S \left[ \alpha_1 F_1 + \sum_{i=2}^n \alpha_i \frac{\lambda_i^S}{\lambda_1^S} F_i \right] \\ &= \lambda_1^S \left[ \alpha_1 F_1 + \sum_{i=2}^n \left( \frac{\lambda_i}{\lambda_1} \right)^S \alpha_i F_i \right] \end{aligned}$$

$$\left[ \frac{\lambda_i}{\lambda_1} \right]^S > 1 \quad (i=2,3,\dots,n)$$

であるから、 $S$  が十分大きくなると上式の第2項

— 37 —

の重み係数  $w$  は正負の値を取り、正ならば特性核行列の入力パターンに対する類似度を大きくし、逆に負ならば上記類似度を小さくする作用を呈する。

また  $K'$  は  $S_n$  なる学習パターンを学習する前の特性核を示しており、 $K$  は学習パターン  $S_n$  の学習によって更新された特性核を示している。

しかる後、このようにして求められた特性核に対して、その固有値と固有ベクトルを求める処理が行われ、この固有値と固有ベクトルとに基いて前述した複合類似度計算に用いられる標準パターンが作成される。

標準パターンは、上記特性核を  $KL$  展開することによって求められるものであり、例えばべき乗方による  $KL$  展開によってその標準パターンが求められる。

今、特性核  $K$  が固有値  $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n$  を持ち、これに対応する固有ベクトル  $F_1, F_2, \dots, F_n$  を持つものとする。この場合、その任意ベクトル  $u_0$  は、上記固有ベクトル  $F_1, F_2, \dots, F_n$  の線形結合

— 36 —

が0に収束することになる。

故に前述した式を

$$K^S u_0 = \alpha_1 \lambda_1^S F_1$$

と看做することができる。

このことは、 $(K^{S+1} u_0)$  と  $(K^S u_0)$  との比が固有値  $\lambda_1$  であることを示している。また  $(K^S u_0)$  は固有ベクトル  $F_1$  に比例していることが示される。

ところでこのような理論に基づく演算過程にあつては、その演算途中結果が直ぐにスケールアウトするすることが多い。そこで  $u_0$  を任意の、例えば単位ベクトルとし、

$$\begin{aligned} v_{s+1} &= K u_0 \\ u^{s+1} &= (v_{s+1}) / (b_{s+1}) \\ &\quad (s=0,1,2,\dots) \end{aligned}$$

なる演算を実行するようにする。ここで  $(b_{s+1})$  は、ベクトル  $(v_{s+1})$  の絶対値が最大の要素である。このとき、

$$u_{s+1} = (v_{s+1}) / (b_{s+1})$$

— 38 —

$$\begin{aligned}
&= (K u_s) / (b_{s+1}) \\
&\left\{ \right. \\
&= (K v_s) / (b_{s+1} \cdot b_s) \\
&\left. \right\} \\
&= (K^{s+1} u_0) / (b_{s+1} \cdots b_s)
\end{aligned}$$

となることから、これより  $\lambda_1, b_{s+1}, F_1, u_{s+1}$  を求めることが可能となる。

このようにしてその絶対値が最大の固有値  $\lambda_1$  と固有ベクトル  $F_1$  とを求めたら、次に同様にしてその絶対値が次に大きい固有値  $\lambda_2$  と固有ベクトル  $F_2$  とを求める。

ここで

$$K' = K - \lambda_1 F_1 F_1^t$$

を考えると、

$$F_1^t F_1 = 0 \quad (i=2, 3, \sim, n)$$

より、

$$\begin{aligned}
K' F_1 &= K F_1 - \lambda_1 F_1 F_1^t F_1 \\
&= \lambda_1 F_1 - \lambda_1 F_1 = 0 \quad (i=1)
\end{aligned}$$

- 39 -

$$\begin{aligned}
K' F_1 &= K F_1 - \lambda_1 F_1 F_1^t F_1 \\
&= \lambda_1 F_1 \quad (i \neq 1)
\end{aligned}$$

となる。従って上記  $K'$  は、

$$|\lambda_2| > \cdots > |\lambda_r| > \cdots > |\lambda_n| > 0$$

なる固有値を持つことがわかる。尚、ここでは  $F_1$  は正規化されているとしている。

このような処理は、前記特性核を

$$K' = K - \lambda_1 F_1 \cdot F_1^t$$

として変換した  $K'$  に対して、上述した処理を繰返し実行することによって達せられる。この処理によって絶対値の大きい固有値とそれに対応する固有ベクトルが順に求められ、辞書の学習が行われる。

第21図はこのような計算アルゴリズムに基づいて実行される辞書の学習処理の手続きを示すものである。

次に文字認識部21について説明する。

この文字認識部21は、スキャナ等によって読取られた文字を認識する第1の文字認識ブロックと、タブレット等を介してオンライン入力される文字

- 40 -

情報を認識する第2の文字認識ブロックとによって構成される。

この第1の文字認識ブロックは、例えば第22図に示すように、スキャナ等によって読取り入力された画像データを格納する画像メモリ21aと、この画像メモリ21aに格納された画像データ中から認識対象とする文字が記載された領域を検出する領域検出部21b、この領域検出結果に従って前記画像メモリ21aに格納された画像データ中から認識対象とする文字データを抽出する文字抽出部21c、そして標準パターン辞書21dに予め登録された認識対象文字の各標準文字パターンと、上記文字抽出部21cにて抽出された文字パターンとを個々に照合して文字認識する識別部21eとによって構成される。

この文字認識ブロックは、例えば第23図に示すようにFAX送信原稿用紙21f上の所定の位置に設定され、送信宛先が記入される文字枠21gに記載された文字を認識するものである。このような送信宛先が記載される原稿用紙21fは、送信原

- 41 -

稿が複数枚からなる場合、その一番最初(1枚目)の原稿として用いられる。そしてこの1枚目の原稿の読取り入力された画像データが文字認識処理の為に前記画像メモリ21aに蓄積される。

領域検出部21bは、予め定められているFAX送信原稿用紙21fのフォーマット情報から前記文字枠21gの位置情報を得、認識対象とする文字が記載される領域を検出するものである。文字抽出部21cはこの領域検出情報と、その画像情報の射影パターンの情報とを用いて、例えば第24図に示すように前記文字枠21gに記載された文字の画像データを個々に抽出している。

識別部21eは、例えば特公昭49-12778号公報等の開示されるように、抽出された文字画像からその文字パターンの特徴を抽出し、その抽出した文字パターンと標準パターン辞書21dに登録された各文字の標準パターンとをパターンマッチングしている。そしてこのパターンマッチングによって照合の取れた標準パターンの文字カテゴリをその認識結果として求めている。

- 42 -

尚、パターンマッチングの手法は種々変形できることは云うまでもない。

ところでタブレット等を介してオンライン入力される文字情報を認識する第2の文字認識ブロックは、例えば第25図に示すように構成される。

この第2の文字認識ブロックは、タブレット等を介してオンライン入力される文字の筆記ストロークを示す位置座標の系列を順次検出する座標検出回路21hを備えている。

この座標検出回路21hにて検出された位置座標の時系列データは前処理回路21iに入力され、前記タブレット4における検出誤り等の微小な雑音が除去された後、座標系列記憶回路21jに順に記憶され、文字認識処理に供される。尚、この前処理回路21iにて、例えば1文字分の文字が入力されたとき、その文字の大きさの正規化処理等が行われる。

また画数検出回路21kは、例えば筆記ストロークの途切れ（位置座標データの時系列の区切り）から、その文字パターンの筆記ストローク数、つ

— 43 —

置座標の情報を用いるようにすれば良い。

以上のような機能を備えた文字認識部21によって、スキャナ等を介して読取り入力された文字情報や、タブレット等の位置座標入力装置を介してオンライン入力される文字情報がそれぞれ文字認識される。

次に図形認識部22について説明する。

この図形認識部22は、例えば第26図に示すように構成される。入力部22aは、例えば撮像入力された図形画像を記憶し、図形認識処理に供する。輪郭追跡部22bは、例えば線分の追跡方向を第27図に示すように8方向に分け、入力画像中の図形の輪郭を追跡したときにその追跡方向がどの向きであるかを順に求めている。具体的には、例えば第28図に示すように三角形の図形を右回りに追跡し、その追跡の向きの情報を、例えば

「1.2.~2.3.4.~4.5.7.~7」

なる方向コードの系列として求めている。

セグメンテーション部22cは、このようにして求められる方向コードの系列から、例えばその曲

— 45 —

まり画数を検出している。

しかして認識処理部21aは、前記画数の情報に従って標準特徴パターンメモリ21nに登録された認識対象文字カテゴリの標準パターンの中から、該当する画数の標準パターンを選択的に抽出している。そしてこの標準パターンの各ストロークの特徴と座標系列記憶回路21jに記憶された入力文字パターンのストロークの特徴とを相互に比較（マッチング処理）している。答決定回路21pはそのマッチング処理結果を判定し、入力文字パターンのストロークの特徴に該当するストロークを持つ認識対象文字カテゴリを、その認識結果として求めている。

つまりオンライン入力される文字パターンの筆記ストロークの特徴に従って、そのストロークの特徴を標準文字パターンのストロークの特徴とマッチング処理して上記入力文字パターンを認識するものとなっている。

尚、ストロークの特徴としては、筆記ストロークを折線近似したときの端点や交点、折点等の位

— 44 —

りの部分等の特異点を抽出し、この特異点に従って該図形の輪郭を画数の特徴部分に分割している。マッチング部22dはこのようにしてセグメンテーションされた図形輪郭の情報と、辞書メモリ22eに登録されている各種図形の特徴情報とをマッチング処理して入力図形を認識するものとなっている。

例えば第29図に示す図形が与えられた場合には、その輪郭追跡によって求められる方向コードの系列から、例えば相互に隣接する3つの輪郭点(1-1)(1)(1+1)で方向コードの和を順に求め、これをその中央の輪郭点1における方向コードとして平滑化処理する。この平滑化処理によってノイズ成分の除去を行なう。

しかる後、セグメンテーション部22cにて輪郭の特徴点である端点、つまり曲りが急峻な点を検出し、その端点を中心としてその輪郭を分割する。そして分割された輪郭部分毎に辞書メモリ22eと照合し、その認識結果を求める。

以上の処理によって、第30図に例示するよう

— 46 —

に丸図形は端点が存在しないこと、三角図形は端点が3つ検出されること、四角図形は端点が4つ検出されること等から、これらの図形がそれぞれ識別認識される。この際、上記各端点がそれぞれ凸状であることや、端点を結ぶ輪郭が直線・曲線である等の情報を図形識別に利用しても良い。

これに対してイメージ認識部23は次のように構成される。

第31図はこのイメージ認識部23の概略構成を示すもので、原画画像メモリ23a、2値化装置23b、処理画像メモリ23c、細線化装置23d、そしてコード変換装置23eによって構成される。

画像メモリ23aは与えられた認識対象イメージ画像を記憶するもので、2値化装置23bはこれを2値化処理して画像メモリ23cに格納している。この2値化レベルは、例えば2値化画像をディスプレイモニタしながら可変設定される。

しかして細線化装置23dは2値化されたイメージ画像を細線化処理してそのイメージを線図形化するものである。この細線化処理されたイメージ

— 47 —

グメントおよびそのセグメント中の特徴点の情報を総合して前記イメージ図形を表現する情報、例えば各セグメントの始点および終点の位置座標、およびそのセグメントの種別を特定するコード情報を得る。

例えば入力イメージ画像が第33図(a)に示す如く与えられた場合、その入力画像中のイメージ線図形23nを細線化して抽出し、同図(b)に示すようにセグメント分割する。この例では、円図形と四角図形とが直線によって所謂串刺しにされたイメージ線図形23nが入力されている。しかしてこのイメージ線図形23nは、第33図(b)に示すようにその交点で分割され、2つの半円と2つのコの字状図形、および4つの直線にセグメント化される。

曲率変換部23gは、第34図に示すようにセグメント分割された各セグメントの曲率を求めており、前記直線・曲線分割部23h、曲線分割部23i、屈折点分割部23j、および変曲点分割部23kはその曲率変化点から各セグメントの特徴点を検出してい

— 49 —

画像によって前記画像メモリ23cが替えられて認識処理に供される。

コード変換装置23eは、例えば第32図に示すように構成され、先ずセグメント分割部23fにて上記細線化画像を複数のセグメントに分割している。このセグメントの分割は、例えば線図形をその端点や分岐点、交点にて分割することによって行われる。曲率変換部23gはこのようにして分割された複数のセグメントについて、それぞれその曲率を求めている。

直線・曲線分割部23h、曲線分割部23i、屈折点分割部23j、および変曲点分割部23kは、上述した如く分割された各セグメントを、その曲率の情報に従って更に分割するもので、これらによって屈折点や直線と曲線との切替わり点、変曲点、曲線における半径変化点等がそれぞれ検出される。このようなセグメント分割と特徴点検出によって前記イメージ線図形を構成する各部の情報がそれぞれ抽出される。

近似情報作成部23mは、これらの分割されたセ

— 48 —

る。具体的には第34図(a)に示す例では2つの直線の屈折点における曲率が急峻に増大することから、その曲率の変化から屈折点を検出することが可能となる。また第34図(b)に示す例では直線から曲線への変化部分で曲率の変化が検出されるので、この曲率の変化からその特徴点を検出することができる。

同様にして第34図(c)、(d)に示す例でも、その曲率の変化点から、そのセグメントにおける特徴点を検出することが可能となる。

このようにしてイメージ認識部23では、与えられたイメージ図形をセグメント化し、各セグメントの特徴点を検出している。そして該イメージ線図形を複数のセグメントの各種別を示すコード情報とその位置座標として近似表現して認識するものとなっている。

さて音声照合部17は次のように構成されている。この音声照合部17は、音声入力した話者を個人認識(個人同定)するものであり、例えば第35図に示すように構成される。

— 50 —

即ち、音声入力部17aを介して与えられる音声は、音韻フィルタ17bおよび個人用フィルタ17cにてそれぞれフィルタリングされ、その音声特徴が抽出される。音韻フィルタ17bの複数のチャンネルの各帯域は、例えば第36図(a)に示すように音声周波数帯域を等分割して設定されている。このようなフィルタ特性を備えた音韻フィルタ17bによって入力音声の音韻特徴を示す特徴パラメータが抽出される。尚、各チャンネルの帯域幅を、音声周波数帯域を対数関数的に分割設定したものとしても良い。

これに対して個人用フィルタ17cの複数のチャンネルの各帯域幅は、第36図(b)に示すように音声周波数帯域を指数関数的に分割して設定されている。このようなフィルタ特性を備えた個人用フィルタ17cによって、前記入力音声の低域から中域にかけての音声特徴が、高域側の特徴に比較して多く抽出されるようになっている。そしてこれらの各チャンネルのフィルタ出力が個人照合の特徴パラメータとして求められている。

— 5 1 —

の発声者であるとして個人同定している。

ここで個人用フィルタ17cの特性について更に詳しく説明すると、前述したように音韻特徴フィルタ17bとは異なる特性に設定されている。この音声の個人性の識別性について考察してみると、その識別性は、例えば

$F \text{ 比} = (\text{個人間分散}) / (\text{個人内分散})$   
として与えられるF比によって評価することができる。

今、音韻フィルタ17bに設定されたフィルタ特性の各チャンネル出力のF比について検討すると、第37図に実線で示す指数関数的な傾向を示す。これ故、従来では専ら高域側の音声特徴情報を利用して個人照合を行なっている。

しかし音声の高域側の特徴だけを用いるよりも、全周波数帯域の音声特徴を用いて個人同定が可能であれば、その照合精度が更に向上すると考えられる。即ち、全周波数帯域においてF比の値が1以上となり、個人間分散が個人内分散を上回れば、更に精度の高い個人照合が可能となる。

— 5 3 —

しかして単語認識部17dは、前記音韻フィルタ17bを介して求められた音韻特徴パラメータから、その入力音声を示す単語を単語辞書17eを参照して認識するものである。この単語認識の機能は前述した音声認識部19と同様であり、該音声認識部19の機能をそのまま利用するようにしても良い。そしてこの単語認識結果に従って個人辞書17fの個人照合に供される辞書が選択される。この個人辞書17fは、話者照合の対象とする個人が予め発声した特定の単語の前記個人用フィルタ17cによる分析結果を、その単語毎に分類して登録したものである。

しかして話者照合部17gは、個人辞書17fから選択された該当単語の各特徴パラメータと、前記個人用辞書17cにて求められた入力音声の特徴パラメータとの類似度を計算し、その類似度値を所定の閾値でそれぞれ弁別している。そしてそれらの弁別結果を相互に比較して、例えば類似度値が最も高く、次に高い類似度値との差が十分にある特徴パラメータを得た個人カテゴリを該入力音声

— 5 2 —

そこでここでは、前述したように個人用フィルタ17cの特性を指数関数的に定め、個人性の特徴が顕著である高域側については大雑把に特徴抽出し、低域側のチャンネル割当て数を増やすことによって該低域側の音声特徴を細かく抽出するようにしている。

具体的には各チャンネルのF比の変化が指数関数的な傾向を示すことから、低域側チャンネルの帯域幅に比較して高域側チャンネルの帯域幅を指数関数的に増大させたフィルタバンクを構成し、これを個人用フィルタ17cとしている。

このように構成されたフィルタ17cの各チャンネル出力によれば、そのF比は第37図に破線で示すようになり、中域でのF比の大幅な向上が認められる。この結果、高域側の音声特徴のみならず、中域における音声特徴をも積極的に利用して個人照合を行なうことが可能となり、その照合精度の向上を図ることが可能となる。

即ち、この音声照合部17では、入力音声の単語認識に供する特徴とは別に、フィルタバンクの工

— 5 4 —



夫によりその個性が顕著に現われる特徴情報を抽出している。この結果、入力音声に対する音韻認識とは独立にその話者に対する個人同定、つまり個人照合を高精度に行なうものとなっている。

次に音声合成部26について説明する。

音声合成部26は、第38図に示すように判別器26a、復号器26b、規則パラメータ生成装置26c、および音声合成器26dを備えて構成される。

判別器26aは入力されたコード列が文字列であるか、或いは音声合成の為の分析パラメータを示す符号列かを判定するものである。この情報判別は、例えば入力コード列の一番最初に付加された識別情報を判定することによって行われる。そして分析パラメータであると判定した場合には、その符号列を復号器26bに与え、これを復号処理してその音韻パラメータと韻律パラメータとをそれぞれ求めている。

また文字列と判定した場合には、その文字列データを規則合成パラメータ生成装置26cに与え、その音韻パラメータと韻律パラメータとの生成に

— 55 —

てC Vファイル26hから音節パラメータを順次求めて補間結合している。この音声パラメータ生成部26gにて上記音韻記号列から音韻パラメータ系列が生成される。

また韻律規則は、単語・文節境界等の文法情報に従って発話の境界や息継ぎ位置を決定し、各音の継続時間長やポーズ長等を決定するものである。同時にこの韻律規則により、各単語の基本アクセントをベースとし、その文節アクセントを考慮した韻律記号列が生成される。韻律パラメータ生成部26iはこの韻律記号列を入力し、ピッチの時間変化パターンを表わす韻律パラメータ列を生成している。

一方、入力コード列が音声合成の為の分析パラメータを示す符号列である場合、前記復号器26bは次のように機能している。

即ち、分析パラメータの符号列がC Vファイルのケプストラム係数を示す場合、その符号列26aは一般に第40図に示すようにパラメータP（ピッチ）と $C_0, C_1, \sim C_n$ （ケプストラム係数）に

— 57 —

供している。

音声合成器26dは、このようにして復号器26bまたは規則合成パラメータ生成装置26cにて求められた音韻パラメータと韻律パラメータとに従い、音源波を声道近似フィルタを介して処理して合成音声波を生成している。

ここで規則合成パラメータ生成装置26cについて更に説明すると、該装置26cは第39図に示す如く構成されている。文字列解析部26eは言語辞書26を参照して入力文字列中の単語を個々に同定し、その単語についてのアクセント情報や単語・文節境界、品詞・活用等の文法情報を求めている。そしてこの解析結果に対して音韻規則、および韻律規則がそれぞれ適用され、その制御情報が生成される。

ここで音韻規則は、解析された単語の読みの情報を与えると共に、単語の連接によって生じる連濁や無声化等の現象を実現し、その音韻記号列を生成するものである。音声パラメータ生成部26gはこの音韻記号列を入力し、その音節単位に従っ

— 56 —

対してビット割当てがなされて情報圧縮されている。そこで復号器26bではパラメータ変換テーブル26nを用い、上記情報圧縮された分析パラメータを音声合成器26dに合せたビット数に変換・復号している。例えば各パラメータをそれぞれ8ビットに変換し、音韻パラメータ列（ケプストラム係数）とその韻律パラメータ列（ピッチ）とをそれぞれ求めている。

音声合成器26dは、例えば第41図に示すように有声音源26qと無声音源（M系列発生器）26rとを備え、入力される韻律パラメータ列のピッチデータPに従って有声音源波（ $P \neq 0$ ）、または無声音源波（ $P = 0$ ）を選択的に発生している。この音源波は前置増幅器26sに入力され、前記音韻パラメータのケプストラム係数 $C_0$ に応じてレベル制御されて対数振幅近似ディジタルフィルタ26tに入力される。この対数振幅近似ディジタルフィルタ26tは前記音韻パラメータのケプストラム係数 $C_1, \sim C_n$ に従って声道特性を近似する共振回路を構成し、上記音源波をフィルタリング処

— 58 —

理するものである。この対数振幅近似デジタルフィルタ26tにて前記音韻パラメータおよび韻律パラメータで示される音声データが合成出力される。

そして対数振幅近似デジタルフィルタ26tにて合成された信号は、D/A変換器26uを介した後、LPF26vを介してフィルタリングされて合成音声信号（アナログ信号）として出力される。

以上のように構成された音声合成部26にて、入力データ系列からそのデータ系列が示す音声規則合成されて出力される。

次にイメージ合成部27について説明する。

イメージ合成部27は、第42図に示すように制御計算機27a、ディスプレイファイルメモリ27b、イメージ合成回路27c、イメージメモリ27d、そして必要に応じてディスプレイ27eを備えて構成される。尚、このディスプレイ27eは、該ワークステーションについて準備された前記ディスプレイ部10であってても良い。

イメージ合成回路27は、専用の制御計算機27a

— 59 —

自然画との合成は次の2つに大別される。その1つは、例えば風景写真等の自然画を背景として、その中に計算機処理によって求められたイメージ画像を埋め込み合成する処理であり、他の1つのは計算機が内部モデルとして持っている或る平面イメージ内に自然画を埋め込み合成する処理からなる。

ここで前者の自然画中にイメージ画像を埋め込み処理する場合には、例えば第43図にその概念を例示するように、計算機が発生する図形中に「透明色」を示すコードを与えておき、これを自然画に対して重ね合せて合成することによって達せられる。すると「透明色」コードが与えられた画像領域は、自然画の情報がそのまま表示されることになり、その他の部分は計算機が発生した図形が表示されることになる。この結果、自然画を背景としたイメージ合成が実現されることになる。この手法はオーバーレイと称される。

これに対して第44図にその概念を示すように画像メモリ内に自然画を蓄込んでおき、その上

— 61 —

の制御の下でディスプレイファイル27bに書込まれているベクトルや多角形・円弧のパラメータを読出し、それによって示される線図形を発生してイメージ・メモリ27dの指定されたアドレスに書込んでいる。このイメージ合成回路27のイメージ発生機能によってイメージメモリ27d上に指定された線図形イメージが構築される。そしてこの線図形イメージは、制御計算機27aの制御の下で前記ディスプレイ27eにて表示されてモニタされる。

またイメージ発生回路27bは、イメージ発生に対する特殊処理機能と塗潰し処理機能とを備えている。この特殊処理機能は、例えば複数のイメージ図形の重なりに対して隠線の消去を行なったり、クリッピング処理を行なう等の機能からなる。また塗潰し機能は、イメージ図形の部分領域を指定された色を用いて塗潰す処理からなる。

このようなイメージ合成回路27bの機能によって、種々のイメージ図形が作成され、またその合成処理等が行われる。

ところで上述した如く発生したイメージ図形と

— 60 —

（手前）に計算機が発生した図形を書込んで行くようにしても良い。この手法はzバッファ法と称されるものであり、前述したオーバーレイ法と共に比較的簡単に実現することができる。

ところで計算機の内部モデルとして示される平面内に自然画を嵌め込み合成する後者の場合には、次のようにして高速処理される。

平面上にある自然画を、3次元空間内の任意の方向を向いている平面に埋め込む為に必要な座標変換は次式で与えられる。

$$u = \frac{C_1 X + C_2 Y + C_3}{C_4 X + C_5 Y + C_6}$$

$$v = \frac{C_7 X + C_8 Y + C_9}{C_4 X + C_5 Y + C_6}$$

但し、X、Yは表示面での座標であり、u、vは自然画での座標である。

この座標変換処理をそのまま実行しようとする、1画素を表示する毎に6回の乗算と2回の除算が必要となり、膨大な計算量と計算処理時間を必要とする。

— 62 —

そこでここでは、次のような中間座標 ( $s, t$ ) を介して上述した演算を2回の変換処理に分解して実行するものとなっている。この演算処理は、例えばアフィン変換を利用して高速に実行される。

$$u = (\alpha_1 s + \alpha_2 t + \alpha_3) / t \quad (1)$$

$$v = (\alpha_7 s + \alpha_8 t + \alpha_9) / t$$

$$s = C_5 X - C_4 Y \quad (2)$$

$$t = C_4 X + C_5 Y + C_6$$

即ち、上述した第(1)式を用いて透視変換を行い、その後、第(2)式を用いて2次元アフィン変換を行なって任意の平面への透視変換を高速に行なうものとなっている。

ここで、第(1)式の分母は座標  $t$  そのものであるから、従来より知られているアフィン変換回路を若干改良するだけでその演算を高速に実行することが容易である。

このようにしてイメージ合成部27では種々のイメージ合成処理を高速に実行するものとなっている。

次に出力形態選択部24について説明する。

— 6 3 —

とメディア識別部24gとによって構成され、上記メディア選択制御部24aによる情報要求を受けて制御部2から与えられる入力メディアを検出し、且つその検出メディアの機能を識別判定するものとなっている。この入力メディア判定部24bは、例えば入力メディアが音声である場合、そのメディアの機能がADPCMである等として識別判定する。

しかる後、メディア選択制御部24aは制御部2に対してそのデータ出力の相手先が自己端末(ワークステーション内)の他の機能ブロックであるか、或いは通信回線等を介して接続される別のワークステーションや通信端末であるかを問合せる。そして別のワークステーションや通信端末に対してデータ出力することが指示されると、メディア選択制御部24aは送信相手局に関する識別情報を制御部2に対して要求する。この要求を受けてデータ出力する相手局に関する情報が相手メディア判定部24cに入力される。

相手メディア判定部24cは、相手局識別部24h、

— 6 5 —

この出力形態選択部24はメディア選択要求信号を受けて起動され、どのメディアを通じてデータ出力するかを選択するものである。つまり種々のメディアのうち、どのメディアを通じて情報伝送するかを選択するものである。

第45図はこの出力形態選択部24の概略構成図であり、メディア選択制御部24a、入力メディア判定部24b、相手メディア判定部24c、メディア変換テーブル24d、および自己メディア機能テーブル24eを備えて構成される。また第46図はこの出力形態選択部24の処理の流れを示すものである。この処理手続きの流れに沿って該出力形態選択部24の機能を説明する。

メディア選択要求信号が与えられるとメディア選択制御部24aは前記制御部2に対してメディア選択動作に必要な入力メディア情報の提供を要求する。そして入力メディア判定部24bに対してメディア情報検出要求とメディア機能識別要求を発する。

入力メディア判定部24bはメディア検出部24f

— 6 4 —

相手局メディア識別部24i、機能識別部24jを備えて構成され、前記メディア選択制御部24aからの識別情報判定要求を受けて作動する。そして相手局に対する識別情報から、先ず相手局を識別し、相手局のメディアを識別する。そしてその相手局メディアの機能を識別する。

具体的には、例えばデータ出力(送信)する相手局が自動FAXであり、その通信メディアがイメージであって、その機能がGⅢタイプである等を識別する。尚、この相手局の識別は、相手局からそのネゴツェーション(ハンドシェイク)機能を用いて送られてくる情報に基づいて行うようにしても良い。またネゴツェーション機能がない場合には、そのメディア検出機能を機能識別部24jに持たせておけば良い。このようにすれば相手側からのメディア情報信号に従ってその機能識別を行なうことが可能となる。

第47図はこの相手局の識別処理手続きの流れを示すものである。この流れに示されるように、例えば通信相手局が電話か否かを判定し、電話で

— 6 6 —

ある場合にはFAX信号が到来するか否かを判定する。

そして相手局が電話であり、FAX信号が到来する場合には、これを相手機器がFAXであると識別すれば良い。また電話であると判定され、FAX信号が到来しない場合には、相手機器は通常の電話であると判定すれば良い。更に電話でないと判定された場合には、相手機器は電話以外の他の通信機器であると判定するようにすれば良い。

このようにして通信相手局のメディアが識別判定されると、次にメディア選択制御部24aは、例えば第48図に示すように構成されたメディア変換テーブル24dを参照して、入力メディア、入力機能、相手機器、相手機器メディア、相手機器の機能に対応したメディア変換選択情報を得る。

例えば入力メディアが音声で、その機能がADPCMであり、相手機器がGⅢタイプのFAXである場合、相手機器のメディアがイメージであること、そして主なメディア変換機能が

(音声) to (コード文字)

— 67 —

字コードの系列で与えられる文章情報を音声情報に変換してデータ出力したり、或いは音声認識部19を用いて音声情報を文字コード系列の情報に変換してデータ出力することになる。

次にデータベース部32について説明する。

データベース部32はコードやイメージ、音声等の各種のデータを整理して格納し、これを種々の応用システムに供するものである。第49図はこのデータベース部32の概略構成を示すもので、コマンドの解析処理等を実行するインターフェース部32a、データベースの検索処理等を実行するデータ操作部32b、種々のデータを格納する記憶媒体としての磁気ディスク装置32cや光ディスク装置32d、そしてその付加機能部32eとによって構成される。

種々のデータは、そのデータの種別に従って複数のリレーションに分類整理され、各リレーション毎にそれぞれ登録されてデータベースが構築されている。

以下、このデータベース部32を、その論理構造、

— 69 —

(コード文字) to (イメージ)

であること等が求められる。同時にそのその変換機能が、

(ADPCM; 音声) to (GⅢ; FAX)

によって実現できることが求められる。この際、従属的なメディア変換情報が存在すれば、これも同時に求められる。

このようにして求められたメディア変換情報が制御部2に与えられ、前記データ出力の形式が選択的に指定される。

尚、データ出力が自己のワークステーション内部に対して行われる場合には、メディア選択制御部24aは自己メディア機能テーブル24eを参照して、データ出力が可能な出力形式を求める。この情報に従ってメディア選択制御部24aは前記メディア変換テーブル24dの自己メディア変換テーブルを参照し、同様にしてメディア変換情報を求め、これを制御部2に与える。

このようにして求められるメディア変換情報に従って、例えば前述した音声合成部26を用いて文

— 68 —

蓄えられるデータ、物理構造、および付加機能の4つに分けて説明する。

論理構造とはこのデータベース部32を応用システム側から見た場合、種々のデータがどのように蓄積されているかを示すものである。ここではリレーショナル・モデルに従った論理構造として、例えば第50図に示すような表のイメージとしてデータが取扱われるようになっている。

表(リレーション)には幾つかの欄(アトリビュート)が設けられており、これらの各欄に所定の単位のデータがそれぞれ格納される。データの単位(タプル)は、各欄に格納すべき1組の値として定められる。このようなタプルを格納した任意個数のアトリビュートによって1つのリレーションが構築される。

しかしてこのモデルにあつては、リレーション名を指定し、その各アトリビュートの値をそれぞれ与えることによってデータベースへのデータの格納が行われる。またデータベースの検索は、リレーションおよびアトリビュートを指定し、そこ

— 70 —

に格納されている値が指定された値、または別のアトリビュートに格納されている値との間で所定の条件を満たすが否かを判定し、その条件を満たすタプルを抽出することによって行われる。

この検索条件は、それらの値が等しい、等しくない、小さい、大きい等として与えられる。この際、複数のアトリビュートについてそれぞれ検索条件を指定し、その条件判定結果を論理処理（アンドやオア等）して行なうことも可能である。更には、複数のリレーションを指定し、或るリレーションの或るアトリビュートの値が他のリレーションの或るアトリビュートの値に等しい等の条件により、複数のリレーションの中から所定のタプルを求めるようなデータベース検索も可能である。

またデータベースからのデータ削除は、基本的には上記検索と同様に行われるが、タプルを抽出することに代えて、そのタプルを抹消することによって行われる。

更にデータ更新も同様であり、得られたタプルの指定されたアトリビュートの値を変更し、こ

— 7 1 —

「会議」等の種々のリレーションからなる。

この例に示されるようにリレーションは、主に個人用として用いられるものと、多くの利用者によって共通に利用されるものとなる。そして個人用のリレーションは各個人が使用するワークステーション毎に設けられ、また共通リレーションは複数の利用者にとって共通なワークステーションに設けられる。

尚、共通のワークステーションとは必ずしもそのハードウェアが他のワークステーションと異なることを意味しない。また個人用のワークステーションが共通のワークステーションを兼ねても良いことも勿論のことである。更には共通のワークステーションは1台に限られるものではなく、システムの階層レベルに応じて複数台設けられるものであっても良い。要するに、複数のワークステーションから容易に特定することのできるものとして共通のワークステーションが設定される。

ここで第50図に示した「個人スケジュール」リレーションのデータ構造について簡単に説明す

— 7 3 —

れを格納することによって行われる。

また各リレーションには、各アトリビュート毎にデータの読出し、追加、変更が許可された人の情報（人名や担当者コード）等が記入され、データ保護の対策が講じられている。尚、このデータ保護対策をアトリビュート毎に行なうことに代えて、リレーション単位で行なうことも可能である。尚、ここに記載される人の情報は複数であっても良い。

しかして第50図に示すリレーションの例では、文字列としてそのデータが示されているが、各リレーションに蓄積されるデータは単なるビット列であっても良い。つまりリレーションに蓄積されるデータは文字列は勿論のこと、イメージ情報や音声情報等であっても良い。

さてこのデータベースに蓄積されるデータは、上述した第50図に示す「個人スケジュール」のリレーションを初めとして、例えば第51図に示すような「住所録」「個人の仕事とその代行者」「操作履歴」「人事」「会議室」「会議室予約」

— 7 2 —

る。

このリレーションからは、そのリレーション名が「個人スケジュール」であり、「△△△△」によって作成されたことが示される。このリレーション作成者「△△△△」は該リレーションに対して全てのデータ操作が許可される。

またこのリレーションに付加されたデータ保護機能によれば、データの読出しは全員に許可されており、データの追加は「〇〇〇〇」と「技術部に所属する者」に対してのみ許可されている。尚、この「技術部に所属する者」は、例えば「人事」のリレーションを参照する等して求められる。またデータの変更は「人レベル」の値が「5」以上のものに対してのみ許可されている。この「人レベル」とは人事リレーションに関するものであり、例えば（部長：8）（次長：7）（課長：6）（主任：5）等として役職を表わす。

更にこのリレーションには、「開始時刻」「終了時刻」「種類」「名称」「場所」等のアトリビュートが設定され、そのそれぞれにデータが書込

— 7 4 —

まれるようになっている。

次にこのデータベース部32における上述した各種のリレーションを実際に記憶する為の物理構造について説明する。

情報蓄積部(記憶部)は大量データを蓄積し、その任意の部分と比較的高速に読み書きすることができ、価格的にきぼど高価でないものとして、前述した磁気ディスク装置32cや光ディスク装置32gが用いられる。

この情報蓄積部へのデータベースの蓄積は、該情報蓄積部の記憶領域を特定の大きさ(例えば数キロバイト程度で、タプル長や計算機の速度等に応じて定められる)毎に区切り、各々をページとして管理して行われる。そして第52図に示すように、例えば第0ページにページ管理の情報を、第1ページにリレーション一覧表の情報を、また第2ページに使用中のページ情報をそれぞれ格納する。

このリレーションの一覧表によって、データベース中における種々のリレーションの所在が示さ

- 75 -

実データを光ディスク装置32d等の別の安価な情報記憶装置にファイルするようにしても良い。この場合には、第9ページや第11ページ等の実データ用ページには、その旨とその装置での実データの格納位置情報を記憶しておくようにすれば良い。

しかししてこのように構築されたデータベースに対する付加機能は、例えば不要データの自動廃棄等からなる。この不要データの自動廃棄は、リレーションの付加情報として【廃棄：可/不可】

【廃棄の方法】等を与えておき、所定の間隔でリレーション毎の消去コマンドを動作させて行われる。

尚、タプルの消去は、例えば会議情報についてはその終了時刻が現在の時刻より前であるか否かを判定して行なうことが可能である。従ってこのようなタプルの消去については、格別の機能追加は不要である。

また付加機能の他の重要な機能としてデータの保全がある。このデータの保全機能は、例えばハ

- 77 -

れる。

例えば第9ページおよび第11ページに格納された実データは、第5ページに格納されたリレーションのアトリビュート(主アトリビュート)に基き、第10ページに格納されたインデックスページの情報に従ってソートされるようになっている。このインデックスページの情報は、アトリビュートの値が幾つから幾つ迄のものがどのページに格納されているかを示すものである。

この主アトリビュート以外のアトリビュートによりデータ検索する場合には、そのアトリビュートについて第20ページのサブ・インデックスを経由して、先ず第21ページや第22ページに示されるサブデータを得る。このサブデータにはアトリビュートの値と前述した主アトリビュートの値のみが入っており、ここで求められるアトリビュートの値を用いて実際のデータが求められる。

尚、例えば画像データや音声データのようにその実データの量が膨大であり、その中の幾つかのビット誤りが問題とならない場合には、これらの

- 76 -

ードウェアの故障や停電等に原因してデータが不正(でたらめになったり失われたりする)となることを防ぐものである。具体的にはこのデータの保全機能は、情報の二重化や磁気テープへの書き出し等によって実現される。

このようにデータベース部32では、種々のデータをリレーション毎に分類整理し、且つページ単位に管理して種々の応用システムに供するものとなっている。

次に作業環境データ収集部25について説明する。

この作業環境データ収集部25は、該ワークステーションに対する過去の操作履歴のデータを収集し、これに基く操作ガイドを行なうものである。

ここで作業環境データ収集部25には、例えば第53図に示すように当該情報処理システムが持つ機能に対応するコマンドと、他の情報システムが持つ機能に対応するコマンドとを対応付けるコマンド対応テーブルが設けられている。

具体的には当該情報処理システムをA、他の情報処理システムをB、C、D、...としたとき、シ

- 78 -

システムAにおけるコマンド“DELETE”に対応する他のシステムのコマンドが“DEL”や“ERASE”、“REMOVE”であることが、該コマンド対応テーブルによって示されるようになってい

る。第54図は利用者により入力されたコマンドを解析し、所定の動作および各種ガイダンスを実行する作業環境データ収集部25の概略構成を示すものである。

この作業環境データ収集部25では、先ずコマンド入力部25aから入力されたコマンドをコマンド解析部25bに与え、コマンド対応テーブル25cを参照して解析している。具体的には第55図に示す手続きの流れに従って入力コマンドがコマンド対応テーブル25cに登録されているかを調べている。即ち、コマンドが入力されると、先ずその入力コマンドがシステムAのものであるか否かが調べられる。そして入力コマンドがシステムAのコマンドであると解析されると、前記コマンド解析部25bは該入力コマンドをコマンド実行部25dに

— 79 —

与え、そのコマンドに基づく所定の動作を実行させている。

一方、入力コマンドがシステムAのものでない場合には、他のシステムのコマンドに該当するかが調べられ、対応付けされているコマンドが存在する場合には、その対応コマンドを画面表示部25eにて表示する。つまり他のシステム(システムB)で用いられているコマンドが、例えば“DEL”である場合には、これに対応するシステムAのコマンド“DELETE”を求め、これを操作ガイダンスとして画面表示部25eに表示することになる。

尚、入力コマンドに該当するコマンドがコマンド対応テーブル25cに存在しなかった場合には、画面表示部25eにてコマンドエラーメッセージの表示を行なう。

具体的には次のようにしてそのコマンド入力に対する処理が行われる。今、システムB、Cの操作経験の利用者が初めてシステムA(当該情報処理システム)を操作するものとする。ここで利用

— 80 —

者がコマンドを入力してデータ“ABC”を消去する場合、従来ではシステムAの取扱説明書に従ってデータ消去の為の“DELETE”なるコマンドを探し、これを入力することが必要となる。

しかしここでは、その利用者は過去の経験に従って、例えばシステムCで用いていたデータ消去コマンド“ERASE ABC”を第56図(a)に示すように入力する。

すると作業環境データ収集部25ではこの入力コマンドを解析し、前記コマンド対応テーブル25cから入力コマンド“ERASE”に対応するシステムAのコマンド“DELETE”を求め、これをガイドとして表示することになる。この結果、利用者はシステムAを初めて操作する場合であってもそのデータ消去のコマンドが“DELETE”であることを知り、そのコマンドをガイドに従って入力することにより、そのデータ消去を行なうことが可能となる。

またファイル名のリストを表示するべく、例えば第56図(b)に示すようにシステムBにおけ

— 81 —

るコマンド“DIR”を入力した場合には、同様にして該システムAにおいて対応するコマンド“CATA”が求められ、ガイド表示される。この結果、このガイドに従ってコマンド“CATA”を入力することによって、そのファイル名のリストが表示される。

このようにこの作業環境データ収集部25の機能を活用することにより、過去の操作経験のあるシステムで用いられていたコマンドの入力によって、そのシステムにおける対応コマンドがガイド表示される。従ってシステム利用者は、過去に得た知識を最大限に利用してシステムを操作することが可能となる。そして当該情報処理システムのコマンドを容易に知ることが可能となる。従ってその都度、当該情報処理システムの操作説明書調べる等の煩わしさから解放される。故に、システムの操作の習得に要する時間を大幅に短縮することができる等の効果が期待できる。

尚、入力コマンドに対応するコマンドを求め、これをガイド表示したとき、その可否の判定入力

— 82 —

を受けて、そのコマンドを実行するようにしても良い。

即ち、第57図にその手続きの流れを示し、第58図にその表示例を示すように他のシステムの消去コマンド“ERASE”し、これに対応するシステムAの消去コマンド“DELETE”が求められたとき、これが正しいか否かを問合せる。そして正(Y)なる指示入力があったとき、その入力コマンドが“DELETE”を示していると判定し、これをコマンド実行部25dに送ってその処理を実行させるようにする。

このようにすれば、コマンドの対応関係がガイド指示されると同時に、その入力コマンドに従って所望とする処理が実行されるので、改めて正しいコマンドを入力し直す必要がなくなる。つまり入力コマンドの対応コマンドへの自動変換が行われて、その処理が実行されることになる。従って、更にその操作性の向上を図ることが可能となる。

尚、対応コマンドはシステムの種類に応じて何種類存在しても良いものである。要はコマンド対

- 83 -

求する程高くなり、また基本機能より高級機能になる程高くなるものである。

しかしてこのような習熟度表は各利用者毎に設けられ、外部記憶装置にそれぞれ記憶されている。尚、システムを初めて利用する利用者に対しては、識別コードの新規設定によりその利用者に対する習熟度表が作成され、外部記憶装置に登録される。

尚、外部記憶装置には、例えば第61図に示すように上述した習熟度表に加えて、前記習熟度クラスに対応した利用機能毎のメッセージが登録されている。このメッセージは習熟度のクラスが低い程、その背景説明を含む判り易い説明となっている。また習熟度の高いクラスほど、簡略な説明と専門的な機能の紹介を含んだ高度な内容となっている。

また習熟度のクラスは、例えば

A：初級者クラス

B：中級者クラス

C：習熟者クラス

のように分類設定される。

- 85 -

応テーブル25cに対応付けてそれぞれ格納しておけば良い。またコマンドは上述した文字列形式に限定されないことも云うまでもない。

次にこの作業環境データ収集部25におけるシステム習熟度のデータ収集について説明する。

第59図はシステム習熟度のデータ収集処理を示す流れ図である。

利用者がその識別コード(ユーザ番号やパスワード等)を入力すると、作業環境データ収集部25はその識別コードに対応する習熟度表を外部記憶装置から求め、装置内部にセットする。この習熟度表は各利用者がシステムの様々な利用機能に対してどの程度習熟しているかを格納したもので、例えば第60図に示す如く構成されている。

即ち、この習熟度表は各利用機能に対してその利用頻度、最終利用年月日時、ユーザが申告した該機能に対する習熟クラス、該機能を前回利用した際の習熟度クラス、更には該機能の複雑度の情報等によって構成されている。

ここで複雑度とは該当利用機能が専門知識を要

- 84 -

しかして入力された識別コードに対応した習熟度表が求められると、次にその利用機能を利用者に選択させる為のメニューが表示される。このメニューに対して利用者は、例えばその利用機能に対応する番号等を入力する。すると制御部ではその入力情報が終了信号か利用機能の選択信号かを判断し、利用機能選択信号の場合には次のように動作する。

即ち、利用機能選択信号が入力されると、先ずその利用者に関する前記習熟度表を参照し、選択された利用機能に対応する利用頻度や最終利用年月日時、申告習熟度クラス等の情報が求められる。そしてこれらの情報に従って重み付け処理を施し、現在の習熟度クラスの決定が行われる。

この習熟度クラスの判定は、例えば利用頻度を $P_1$ 、最小利用年月日時を $T_0$ 、現在の利用年月日時を $T_c$ 、利用者申告習熟度クラスを $X_1$ 、前回利用習熟度クラスを $X_2 \in (A, B, C)$ 、複雑度を $P_c$ 、そして判別関数を $F_r$ としたとき、

- 86 -



$$F_r = K_1 P_1 + K_2 (T_c - T_e) \\ + K_3 G_1 [X_1] \\ + K_4 G_2 [X_2] + K_5 P_c$$

として求められ。但し、上式において  $K_1, K_2, K_3, K_4$  は、実験等によって適切な値に設定される定数である。また上記  $G_1, G_2$  は

$$G_1 = \begin{bmatrix} A & B & C \\ Y_1 & Y_2 & Y_3 \end{bmatrix}, G_2 = \begin{bmatrix} A & B & C \\ Z_1 & Z_2 & Z_3 \end{bmatrix}$$

であり、 $Y_1, Y_2, Y_3, Z_1, Z_2, Z_3$  は、 $A, B, C$  に対する評価重みである。これらの評価重みは

$$Y_1 < Y_2 < Y_3, \quad Z_1 < Z_2 < Z_3$$

なる関係を有し、実験等によって適切な値に設定される。

ここで  $G_1 [X_1]$  は、 $X_1 = A$  のとき  $Y_1$  なる値を取り、 $X_2 = B$  のとき  $Y_2$  なる値を取ることを意味する。また  $(T_c - T_e)$  は、最終利用年月日時から現在までの日数を時間換算したものである。

しかしてクラス判定は、上述した判別関数  $F_r$  の値により次のようにして行われる。

— 87 —

利用者はこのようにして表示される各種メッセージに従ってその処理操作を行なうことになる。

具体的には作成データをファイルに格納する利用機能に対して、その利用者が初級者クラス（Aクラス）と判定されると第63図に示す如きメッセージが表示される。そしてこのメッセージにも拘らず利用者が情報入力を誤った場合には、例えば第64図に示すようなエラーメッセージの表示が行われ、その利用機能に対する操作のガイドが行われる。

またその利用者の習熟度が中級者クラス（Bクラス）と判定された場合には、第65図に示す如きメッセージが表示される。そしてこのメッセージにも拘らず利用者が情報入力を誤った場合には、例えば第66図に示すようなエラーメッセージの表示が行われ、その利用機能に対する操作のガイドが行われる。同様にその利用者の習熟度が習熟者クラス（Cクラス）と判定された場合には、第67図に示す如きメッセージが表示され、情報入力の誤りがある場合には、例えば第68図に示す

— 89 —

$$F_r < N_1 \quad \dots \text{Aクラス}$$

$$N_1 \leq F_r < N_2 \quad \dots \text{Bクラス}$$

$$N_2 \leq F_r \quad \dots \text{Cクラス}$$

尚、判定閾値  $N_1, N_2$  は実験等に基づいて適切に定められる。

このようにして習熟度クラスが決定されると、その決定された習熟度クラスに対応し、且つ前述した如く指定された利用機能に該当するガイドメッセージやエラーメッセージを外部記憶装置から求める。

しかる後、今回決定された習熟度クラスと、前記習熟度表に格納されている前回の習熟度クラスとを比較照合する。そして習熟度クラスに変更がある場合には、その習熟度に変更がある旨を示すメッセージを前記ガイドメッセージ等に付加して書込む。

この習熟度クラス変更のメッセージは、例えば第62図に示すような4種類のメッセージからなる。そしてそのクラス変更の形態に応じて求められ、前記ガイドメッセージ等と共に表示される。

— 88 —

ようなエラーメッセージの表示が行われてその利用機能に対する操作のガイドが行われる。

しかして上述した如く表示したガイドメッセージの空欄に対してデータ入力が行われると、制御部は前述した如く求めている該当利用者の習熟度表の該当利用頻度を（+1）すると共に、最終利用年月日時および前回利用習熟クラスの更新を行なう。そして該利用機能の実行を促すと共に、該該当利用機能が終了したものと看做して前述した利用機能選択の為のメニュー表示動作に戻る。

ここで再び利用機能選択信号が入力されると、上述した処理を再び繰返して実行することになる。しかし終了選択信号が入力された場合には、上述した如く作成・更新した習熟度表を外部記憶装置の習熟度ファイルに、その該当利用者の識別コードと共に書込み、これを保存する。そしての一連の処理手続きを終了する。

このようにして作業環境データ収集部25では、システムの操作に関する習熟度のデータを収集しながら、その収集されたデータに従ってその操作

— 90 —

を適切にガイダンスするものとなっている。

以上が本ワークステーションの基本的な構成とその機能である。

次に本ワークステーションにおける動画の作成機能につき説明する。

この文章データに基づく動画の作成機能は、前記制御部2の制御の下で前述した各部の処理機能を用いることによって実現される。そして、例えばオフィス等で用いられる文書に関し、その文章データの文字列を解析して該文章データで示される内容をわかり易く解説する為の動画を作成するものである。

第69図は動画作成処理の手続きの流れを示すものである。この処理手続きは、処理対照とする特定の文章をその文章IDを指示入力することによって起動される(ステップa)。すると制御部2は指定された文章IDに従って前記データベース32に格納されている該当文章データを読み出し(ステップb)、この文章データを示す文字列を表示装置(ディスプレイ部)10にて表示する(ス

- 9 1 -

%減少した。▽D景気の変動の波をまともに受けている状況である。」

この例に示されるように文章区間の始点は▼で指定され、且つその終点が▽で指定されるようになっている。そして指定された文章区間毎にその管理データA, B, C, D, ...が付されるものとなっている。リンクの指定は、そのような文章区間に対して、例えば各文章区間の特定の文字を対応付ける等して行われる。

しかしてこのようにして文章区間が特定されると、各文章区間毎にその文字列の解析が行われ、動画作成用の文章情報が抽出される(ステップe)。この文章区間の文字列の解析は、上述したリンク情報を加味して行われることは勿論のことである。

文章データの解析による動画作成用データの抽出は、例えば第70図に例示するように上記文章区間の文字列を単語単位に分割し(ステップe1)、その構文を解析することから行われる(ステップe2)。この構文解析によって文章区間の文字列に

- 9 3 -

テップc)。

このようにしてディスプレイ表示された文章データ(文字列)に対して、動画作成に関係のある文章区間の指定が行われる。この文章区間の指定はカーソル制御やライトペンを用いる等して行われる。そして通常は時間的な経緯を伴う動画を作成することから、前記ディスプレイ表示された文章データに対して、複数の文章区間がそれぞれ指定される(ステップd)。

尚、この文章区間の指定は、文章区間の始点と終点とをそれぞれ指定する文章区間範囲の指定と、複数の文章区間の相互に結び付きの深いものを結合指示する文章区間のリンク指定とからなる。

具体的には、例えば次のようにして文章データに対する文章区間の指定が行われる。

「▼山田工業株式会社では、昭和50年度の売上高は250億円であった。▽Aその後、業績が向上し、▼昭和55年度は昭和50年度より80億円上昇した。▽Bしかしながら、▼昭和60年度▽Cは需要後退の影響を受けて、▼昭和55年度に比較して15

- 9 2 -

に対する主語の部分、述語の部分、修飾の部分等がそれぞれ求められる。

その後、構文解析結果に基づいて上記文章の主体を同定し(ステップe3)、更にその主題を同定する(ステップe4)。更に文章データ中に含まれる各種数値データの時間的関係を解析し(ステップe5)、またその述部の意味解析を行う(ステップe6)。

以上の処理手続きを行って、その主体、主題、時間的関係、述部の意味の各情報に従い、該文章区間に含まれる数値データを数値処理する(ステップe7)。この数値処理によって動画作成に必要なデータが抽出される。

具体的には前述した文章データの場合には、文章区間Aから「山田工業株式会社」が主体者であることが同定され、「売上高」が主題であると同定される。尚、主体や主題が同定できない文章区間B, C, Dにあつては、その主体や主題が直前の文章区間と同じであるとしてその解析処理を進める。

- 9 4 -

しかして時間解析は、修飾部分に含まれる時を表現する部分を抽出してその時の情報を求める。例えば「昭和60年度は」なる文字列と「昭和55年度に比較して」なる文字列とから、その時の情報を「昭和60年度が中心である」「その5年前が比較相手として提起されている」等として抽出する。

そして述部の意味解析処理では、「上昇した」「減少した」等がその意味解析結果としてそれぞれ抽出される。

数値処理は、このようにして求められた情報から、例えば次のような動画作成用データを作成する。

- (a) 動画モデルの指定番号 : 1
- (b) 主題 : 売上高
- (c) 主題の数値 : 250, 330, 280
- (d) 主題の単位 : 億円
- (e) 時の数値 : 50, 55, 60
- (f) 時の単位 : 年
- (g) 主体者 : 山田工業株式会社

尚、上記動画モデルの指定番号は、動画の表現

— 9 5 —

れを図形化した画像を図形イメージとして格納すると共に、その図形イメージを制御する制御情報を格納している。

画像生成部41は前述した如き動画作成用データを入力して、その動画モデル番号から作成すべき動画の形態を知る。そしてプロダクト・モデルが指定されている場合には、前記動画モデル・データベース42に準備されている複数種類のモデルの中から、その動画生成環境に応じたモデルを選択する。

しかして画像生成部41では、先ず主題の単位や時の単位等の情報に従って表示画面に対してスケールの設定を行う。そしてこのスケール設定した表示画面に対して前述した主題の数値、時の数値等に基づき、目的とする図形を生成していく。

この際、その図形表示形態を1種類に限定することなく、その状況に応じた手法を適宜採用する。具体的には、売上高の推移を棒、折線、円等のグラフで表現すると共に、その数値データの変化を他の状態、例えばその表示色を変える等して表現

— 9 7 —

形式として準備されている複数のモデルのどれを用いて動画データを作成するかを指定するものである。具体的には、モデル番号1によってプロダクト・モデルが指定され、モデル番号2によって形状変化モデルが指定されるようになっている。

このようにして動画作成用データが抽出された後、これらのデータに従って動画データが作成される(ステップf)。そして、その作成動画データのディスプレイによる表示が行われ(ステップg)、またその動画データのデータベースへの格納が行われる。

ここで動画データの作成について、プロダクト・モデルを使用する場合を例に説明する。動画作成部は、例えば第71図に示すように画像生成部41、動画モデル・データベース42、動画記憶制御部43、そして画像データベース44を備えて構成される。

動画モデル・データベース42は、プロダクト・モデルとしてコンピュータ・グラフィクス画像やTVカメラ等から入力された多値画像、およびこ

— 9 6 —

する。

このような画像生成処理によって、前述した各文章区間毎にその文章区間の内容に応じた動画像が、例えば第72図に示すように棒図形で表現された数値データが順に変化する画像データとして形成される。つまりその文章区間が持つ時間的経緯の情報に従ってプロダクト・モデルの図形イメージ、或いはその属性が可変制御される動画像データが作成される。

具体的には前述した文章データの例では、文章区間Bの動画像としては昭和50年度に比較して売上高が順次増大する過程が動画像データとして生成される。そしてこの場合には、売上高が増大していることから、その図形情報が青色で表示される。またリンクされた文章区間C、Dでは売上高が減少していることから、その売上高が順次減少する過程の動画像が作成され、その図形情報が赤色表示される。

つまり前述した文章データから、各文章区間毎に時間的に経緯に伴う数値データの変化が示され

— 9 8 —

る動画像がそれぞれ作成される。

ちなみに従来システムにおいては、各年度の売上高のデータが静止画としてグラフ表示されるだけであった。そして各文章区間に対応した複数枚の静止画を順次表示したとしても、各年度の売上高の変化がステップ的に表現されるだけであった。

これに比較して上述した動画像によれば、各文章区間毎にその数値データがどのように変化したかが動画イメージとして表現されることになるので、感覚的にもその変化の過程が非常にわかり易くなる。

動画記憶制御部43はこのようにして作成された動画データを前述した文章データに対応付けて画像データベース44に格納し、その再利用を可能とするものとなっている。

以上説明したように本ワークステーションにおける動画作成機能によれば、指定された文章区間の数値データを抽出してその図形情報を求めるだけでなく、その文章区間が持つ時間的な関係等の情報を抽出して上記数値データがどのような推

— 99 —

の体積や形を変化させて動画を生成するようにしても良い。更には、その変化の過程を急速にしたり、逆に緩やかにする等して時間的経緯を表現することも勿論可能である。その他、種々の動画表現を利用して動画データを作成することが可能である。

また指定された文章区間の文字列の解析アルゴリズムや、その解析結果に基づく動画作成用データの抽出処理、また数値データに対する処理アルゴリズムもその仕様に依じて種々変更可能なものである。要するに本発明はその要旨を逸脱しない範囲で種々変形して実施することができる。

#### 〔発明の効果〕

以上説明したように本発明によれば、文章データの指定された文章区間の情報に基づいて、その内容を表現する動画データが、例えばその時間的な経緯に伴う数値データの変化を表現しながら作成される。従って静止画による情報提供に比較して、例えば数値データの変化の過程が非常にわかり易く表現されることになるので、文章データの

— 101 —

移の下で得られたかを解析し、それを動画像として表現するものとなっている。従って図形等によって表現される数値データが、例えば時間的にどのような経緯を持って得られたものであるかをその動画表現によって極めて容易に理解することが可能となる。ちなみに静止画による表現においては、例えば別の静止画と比較しなければその数値的な意味合いを理解することができないと云う不具合がある。従って単に各文章区間毎に静止画を作成し、これを順次表示する従来システムによるものとは本質的に異なって、各文章区間が持つ意味合いを非常に効果的に表現し、文章データの内容理解を容易ならしめる等の実用上多大なる効果が奏せられる。

尚、本発明は上述した実施例に限定されるものではない。例えば動画の表現形式としては、図形の形状を変化させることは勿論のこと、その表示色や表示輝度を変化させても良い。またどのような図形をプロダクト・モデルとして用いるかも限定されない。更には形状変化モデルを用いて物体

— 100 —

内容理解を効果的に補助することが可能となる等の実用上多大なる効果が奏せられる。

#### 4. 図面の簡単な説明

図は本発明の一実施例を示すもので、

第1図は本発明に係るワークステーションの特微的な処理機能を示す図、第2図はワークステーションの概略構成図、

第3図はワークステーションに付随するICカードの外観図、第4図はICカードの構造を示す分解斜視図、第5図はICカードのプリント基板部の構造を示す図、第6図はICカードの半導体集積回路部の構成を示す図、

第7図はワークステーションにおける暗号化処理部の構成を示す図、第8図は暗号・復号化の概念を示す図、第9図は暗号化部の構成図、第10図は復号化部の構成図、第11図はRSA処理部の構成図、

第12図はワークステーションにおけるイメージ照合部の構成を示す図、第13図はイメージ処理される顔の例を示す図、第14図はイメージ・

— 102 —

データの構造を示す図、

第15図はワークステーションにおける音声認識部の構成を示す図、第16図は入力音声パターンの例を示す図、第17図は子音の音響的特徴を示す図、第18図は遷移ネットワークの例を示す図、第19図は音声認識処理の手続きを示す図、第20図は入力音声に対する部分区間検出を説明する為の図、第21図は音声認識辞書の学習処理手続きを示す図、

第22図はワークステーションにおける文字認識部の第1の文字認識ブロックの構成例を示す図、第23図は認識対象となる文字が記載されるFAX送信原稿用紙の例を示す図、第24図は認識対象文字の切出し処理を説明する為の図、第25図は文字認識部における第2の文字認識ブロックの構成を示す図、

第26図はワークステーションにおける図形認識部の構成を示す図、第27図乃至第30図は図形認識処理を説明する為の図、

第31図はワークステーションにおけるイメー

— 103 —

リア変換テーブルの構造を示す図、

第49図はワークステーションにおけるデータベース部の構成を示す図、第50図はデータベースのデータ構造を示す図、第51図はリレーションの例を示す図、第52図はリレーションの構造を示す図、

第53図はコマンド対応テーブルの構造を示す図、第54図はワークステーションにおける作業環境データ収集部の構成を示す図、第55図乃至第58図はコマンド部の処理を説明する為の図、第59図はシステム習熟度のデータ収集処理の流れを示す図、第60図は習熟度表の構造を示す図、第61図乃至第68図は作業環境データ収集部の処理を説明する為の図、

第69図本ワークステーションにおける動画像生成処理の流れを示す図、第70図は指定された文章区間の解析処理による動画像作成用データの抽出処理手続きを示す図、第71図は動画像作成部の構成例を示す図、第72図は文章区間に対応して生成された動画像の例を示す図である。

— 105 —

ジ認識部の構成を示す図、第32図はコード変換装置の構成図、第33図は入力イメージに対する処理例を示す図、第34図はセグメントにおける特徴点検出を示す図、

第35図はワークステーションにおける音声照合部の構成を示す図、第36図はフィルタバンクの帯域分割例を示す図、第37図はフィルタ特性を示す図、

第38図はワークステーションにおける音声合成部の構成を示す図、第39図は規則合成パラメータ生成装置の構成図、第40図は音声パラメータの変換構造を示す図、第41図は音声合成器の構成図、

第42図はワークステーションにおけるイメージ合成部の構成を示す図、第43図および第44図はイメージ合成処理の概念を示す図、

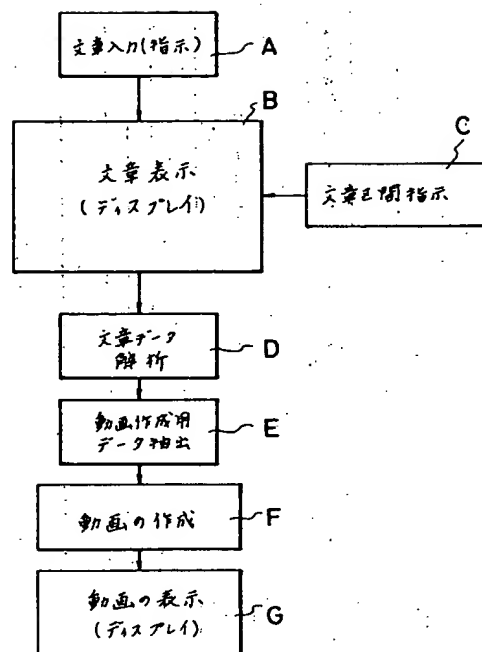
第45図はワークステーションにおける出力形態選択部の構成を示す図、第46図は出力形態選択処理手続きの流れを示す図、第47図は相手局識別処理手続きの流れを示す図、第48図はメデ

— 104 —

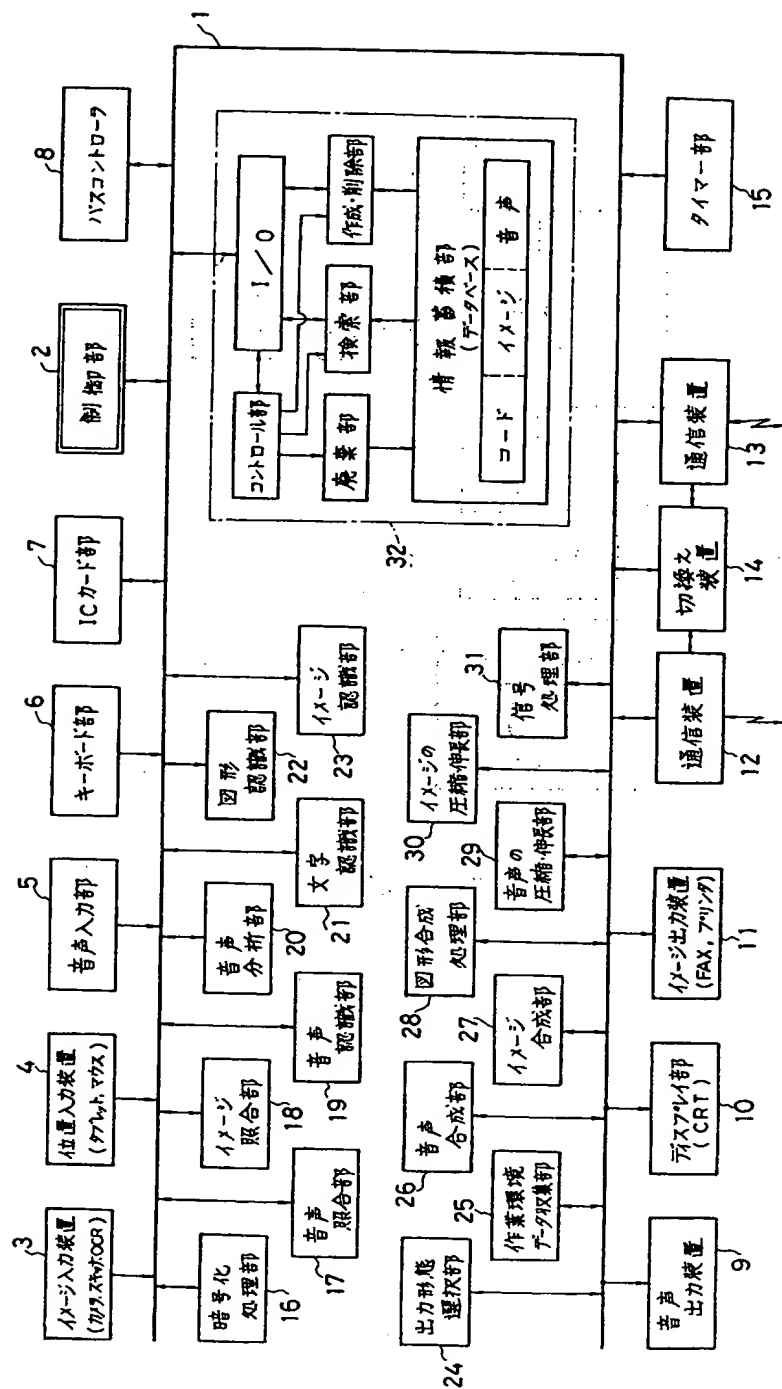
1…バス、2…制御部、3…イメージ入力装置、4…位置入力装置、5…音声入力部、6…キーボード部、7…ICカード部、8…バスコントローラ、9…音声出力装置、10…ディスプレイ部、11…イメージ出力装置、12、13…通信装置、14…切換え装置、15…タイマー部、16…暗号化処理部、17…音声照合部、18…イメージ照合部、19…音声認識部、20…音声分析部、21…文字認識部、22…図形認識部、23…イメージ認識部、24…出力形態選択部、25…作業環境データ収集部、26…音声合成部、27…イメージ合成部、28…図形合成部、29…音声の圧縮・伸長部、30…イメージの圧縮・伸長部、31…信号処理部、32…データベース部、41…画像生成部、42…動画モデル・データベース、43…動画記憶制御部、44…画像データベース。

出願人代理人 弁理士 鈴江武彦

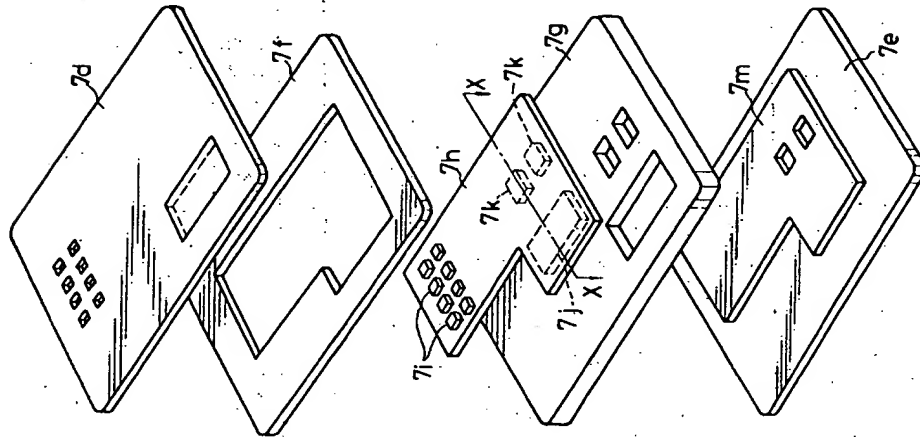
— 106 —



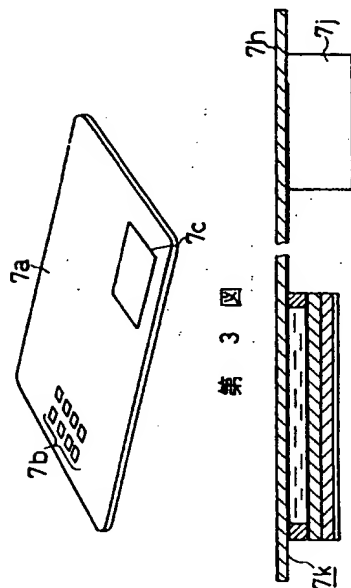
第 1 図



第 2 図

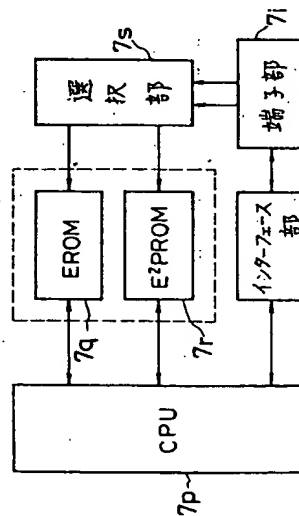


第 4 図

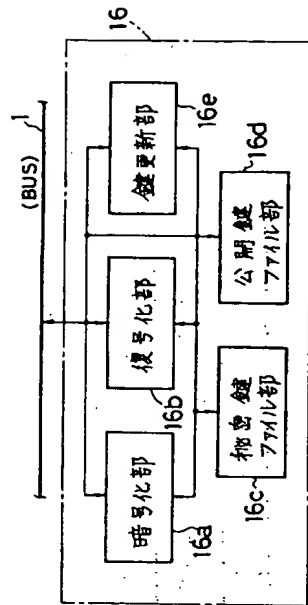


第 3 図

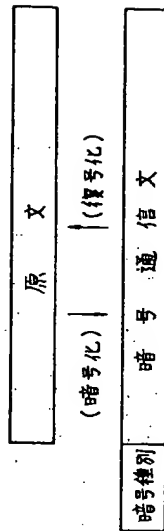
第 5 図



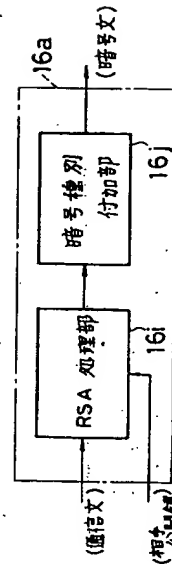
第 6 図



第 7 図

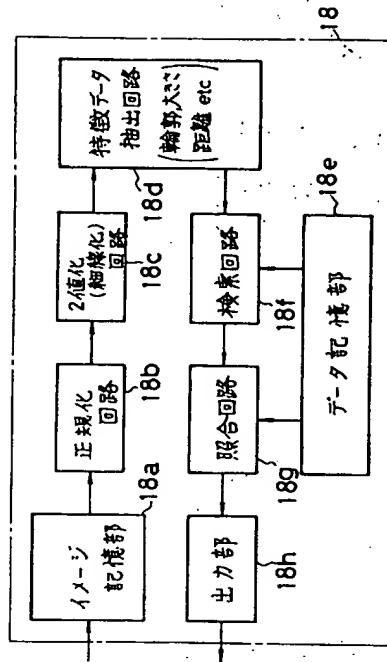


第 8 図

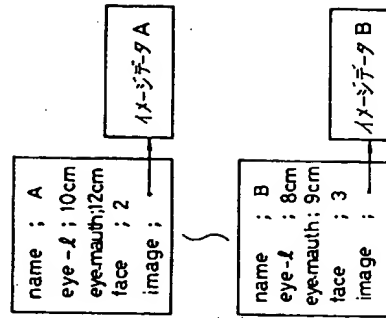


第 9 図

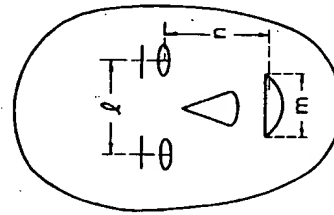




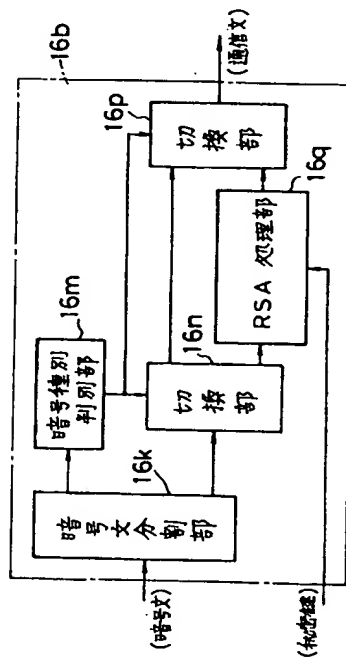
第 12 図



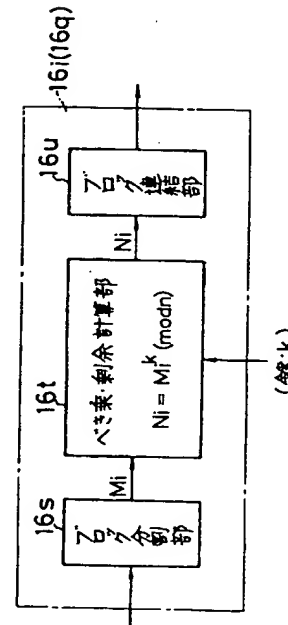
第 14 図



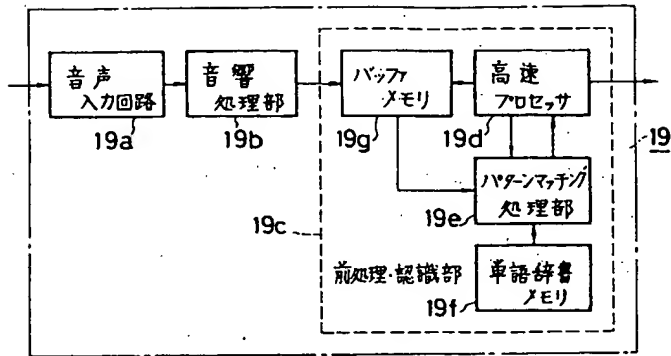
第 13 図



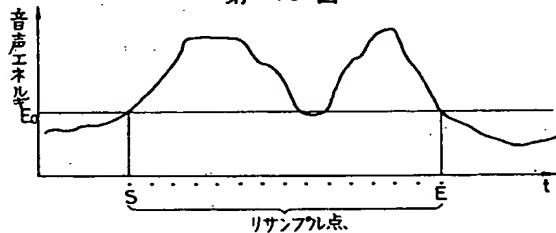
第 10 図



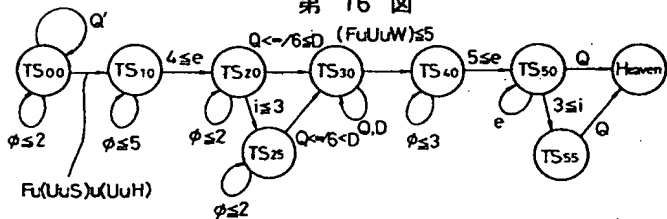
第 11 図



第 15 図



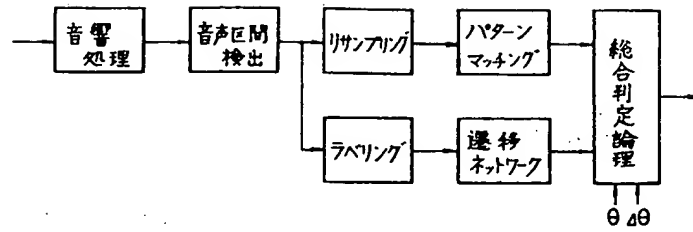
第 16 図



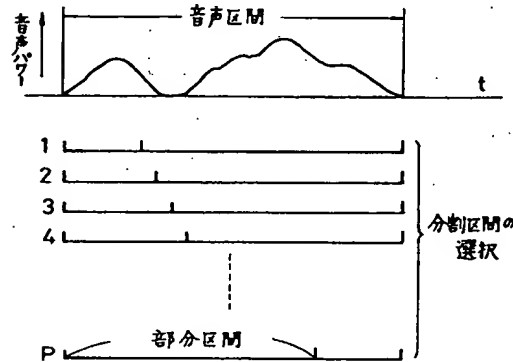
第 18 図

記号	音響的特徴	クロスフィルタの出力の特徴 1 2 3 4 (ch)
Q	無音性	$E < E_0$
U	無声性	
F	摩擦性	
W	摩擦性	
B	バズ	
G	閉鎖性	
N	鼻音性	
S	共鳴性	
H	共鳴性	
M	共鳴性	
D	エネルギー	
V	有声性	( U U F U W )

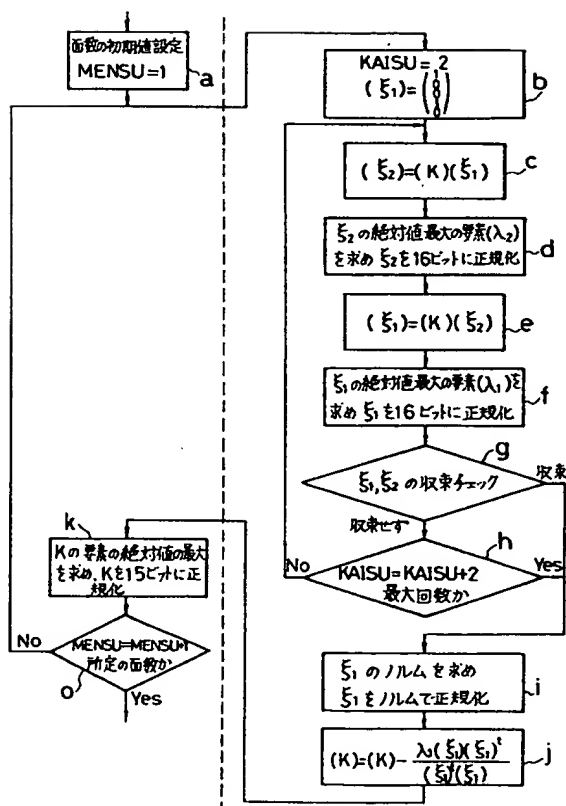
第 17 図



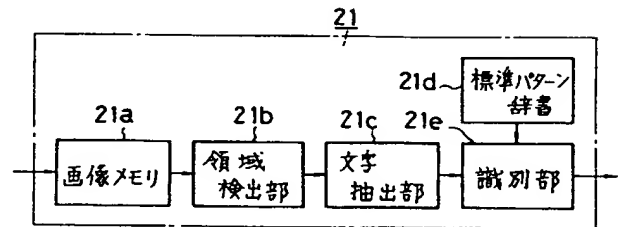
第 19 図



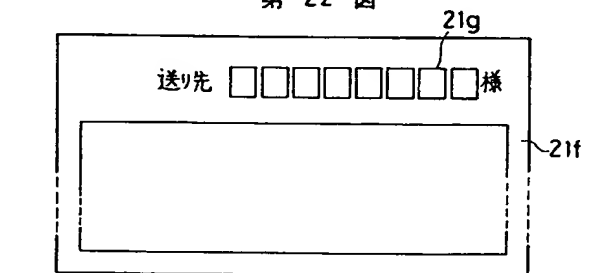
第 20 図



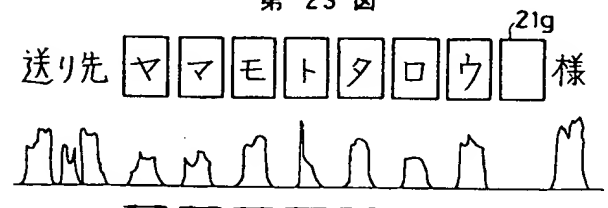
第 21 図



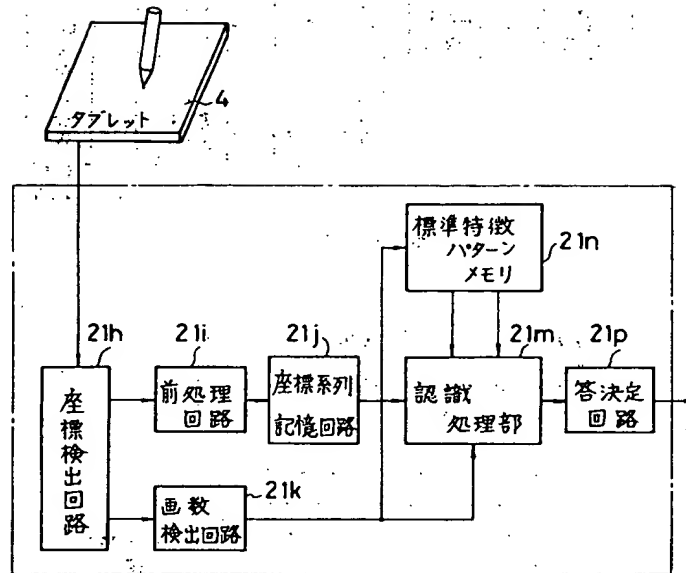
第 22 図



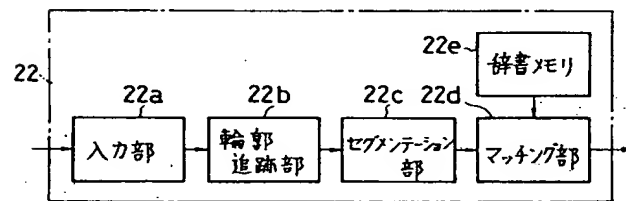
第 23 図



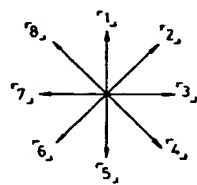
第 24 図



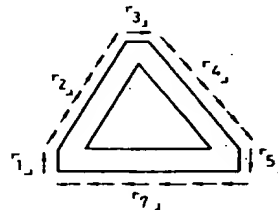
第 25 図



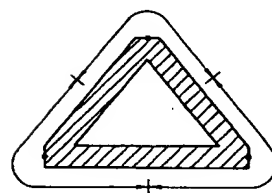
第 26 図



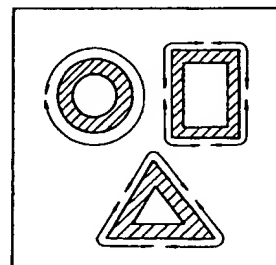
第 27 図



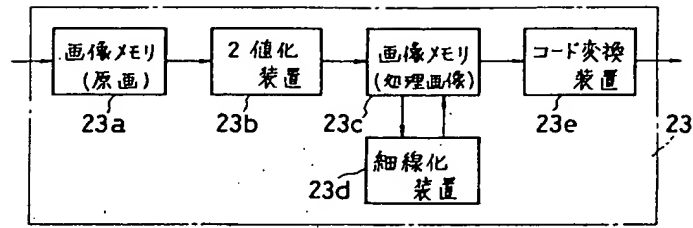
第 28 図



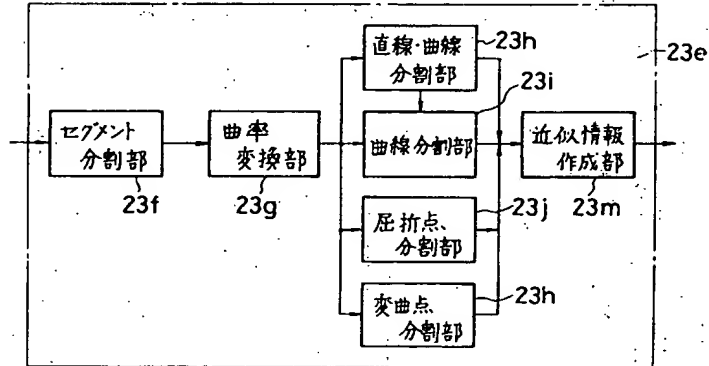
第 29 図



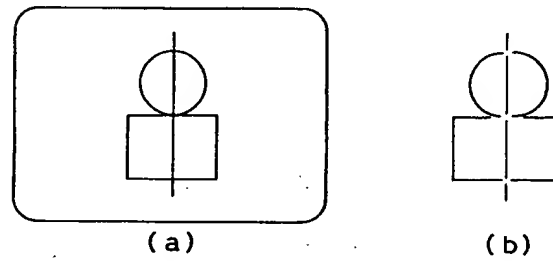
第 30 図



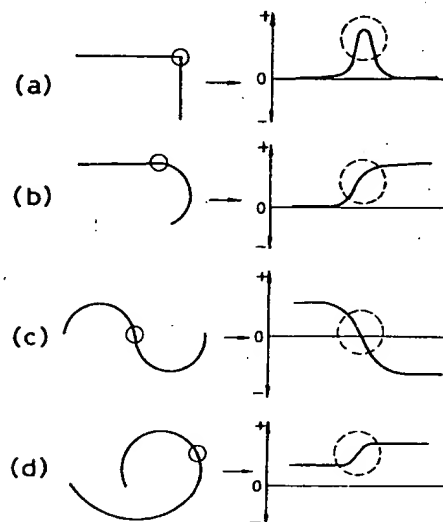
第 31 図



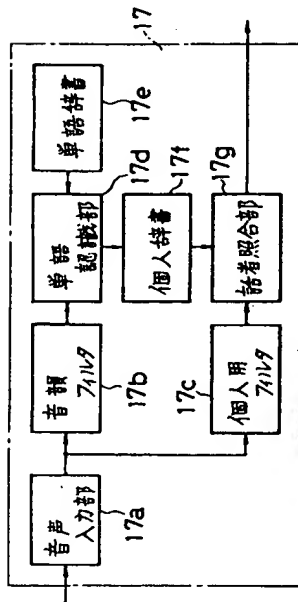
第 32 図



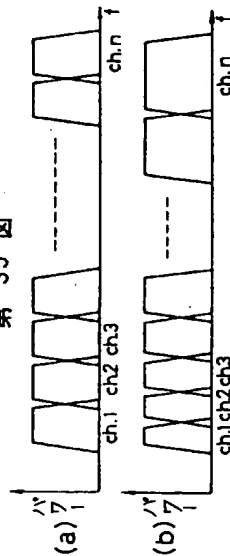
第 33 図



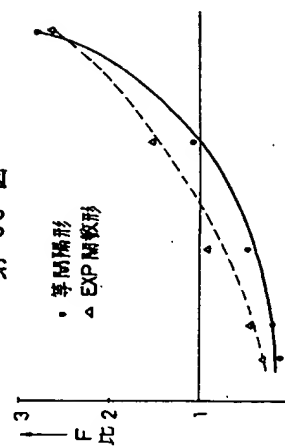
第 34 図



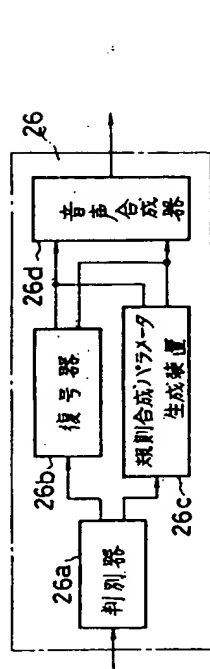
第 35 図



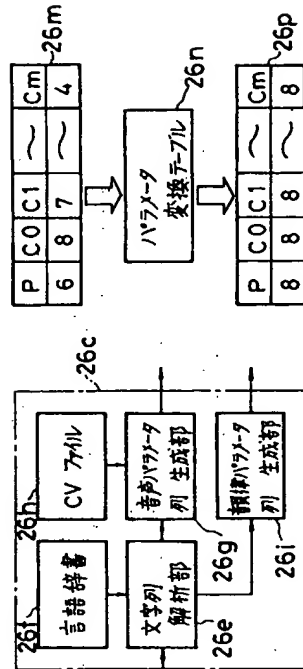
第 36 図



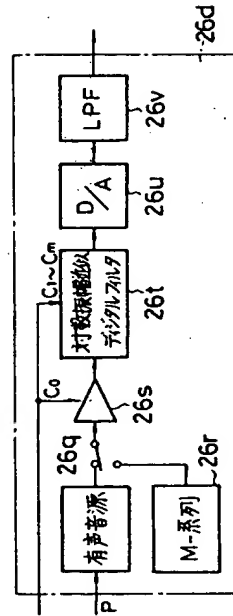
第 37 図



第 38 図



第 39 図



第 40 図

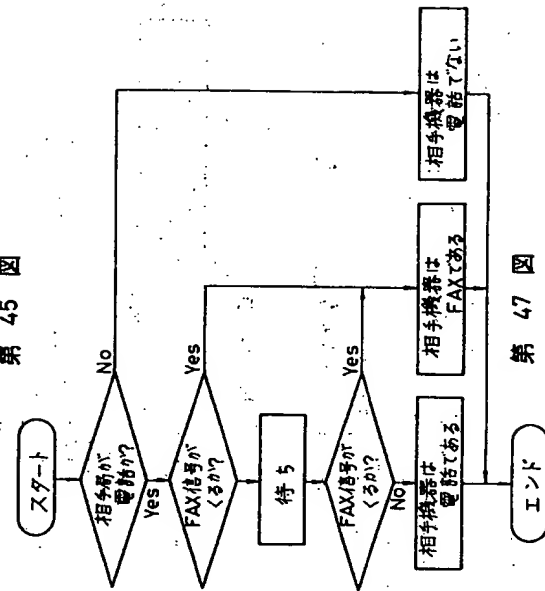
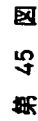
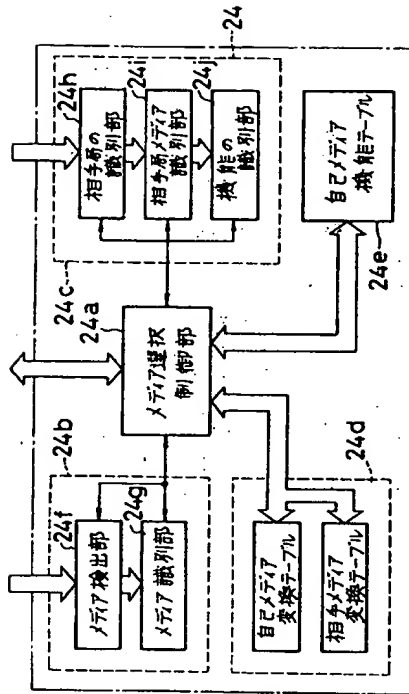


圖 47 第

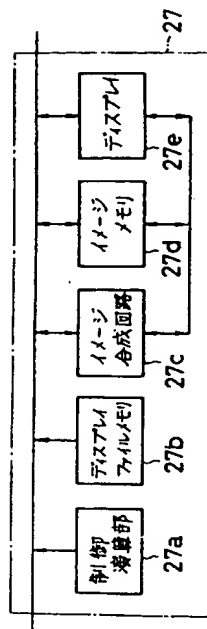
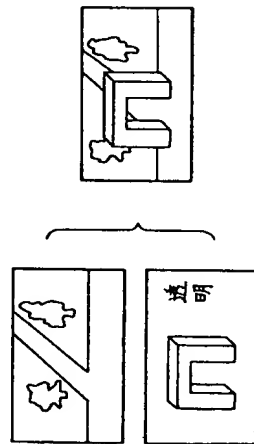


圖 27 集



第 43 圖

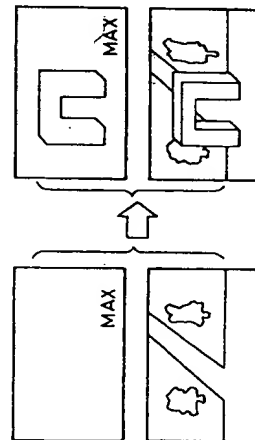
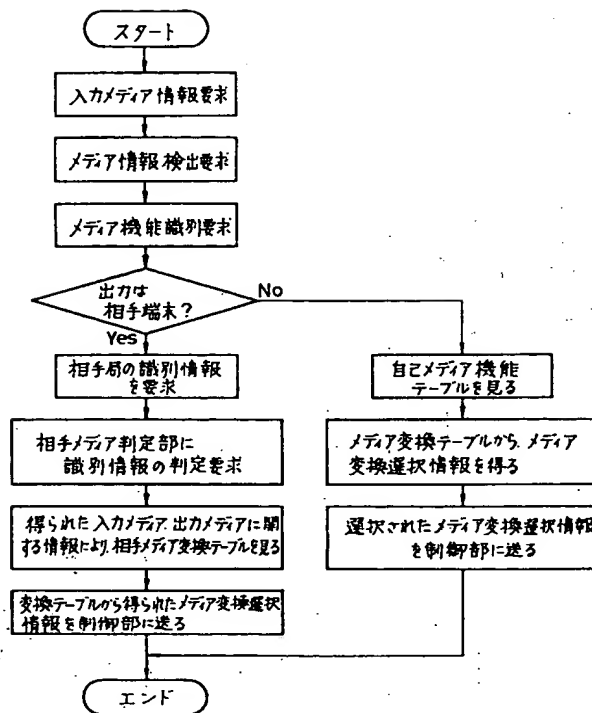


圖 47 集

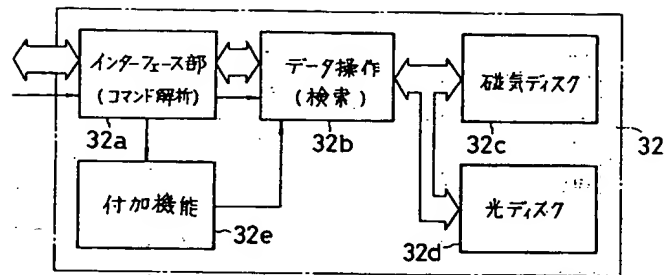


第 46 図

入力 メディア	音 声	音 声	コード文字	マルチメディア	音 声
入力機能	ADPCM	ADPCM	基本クラス (仮想増幅クラス)	ミックスモードクラス (仮想増幅クラス)	log PCM
相手機器	FAX	FAX	電 話	ワークステーション	ワークステーション
相手機器 メディア	イメージ	イメージ	音 声	イメージ	ミックスモード (音声画像文字)
相手機器 の機能	G III	G IV	log PCM	G III	音声: ADPCM イメージ: .....
主な 変換選択	音声→コード文字 コード文字→イメージ	音声→コード文字	文字→コード→音声	文字→コード→イメージ	音声→音声 ⋮
主な 変換機能	ADPCM→GIII	ADPCM →2バイトコード	2バイトコード →log PCM	ミックスモード → GIII	log PCM →ADPCM ⋮
従属な 変換/形式	—	音声(ADPCM) →コード文字 コード文字 →イメージ	—	—	—
従属な 変換機能	—	ADPCM →2バイトコード	—	—	—

第 48 図





第 49 図

データ保護 情報	リレーション名	個人スケジュール					
	作成者	△△△△					
	読み出し	全頁					
	追加	○○○○ ; 所属(技術部)					
	変更	人レベル ≥ 5					
データ	開始時刻	終了時刻	種類	名称	場所	行事レベル	設定者
	86.7.7 9:00	86.7.7 10:30	会議	経営会議	A会議室	4	○○○
	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩

第 50 図

- (a) 

名前	住所	電話番号	重要度
----	----	------	-----

 リレーション名: 住所録
- (b) 

仕事	代行者 1	代行者 2	代行者 3
----	-------	-------	-------

 リレーション名: 個人の仕事と代行者
- (c) 

コマンド	回数
------	----

 リレーション名: 操作履歴
- (d) 

従業員番号	名前	部所	肩書	人レベル	職務場所	WS番号	電話番号
-------	----	----	----	------	------	------	------

 リレーション名: 人事
- (e) 

会議室名	場所	収容人数	OHP有無
------	----	------	-------

 リレーション名: 会議室
- (f) 

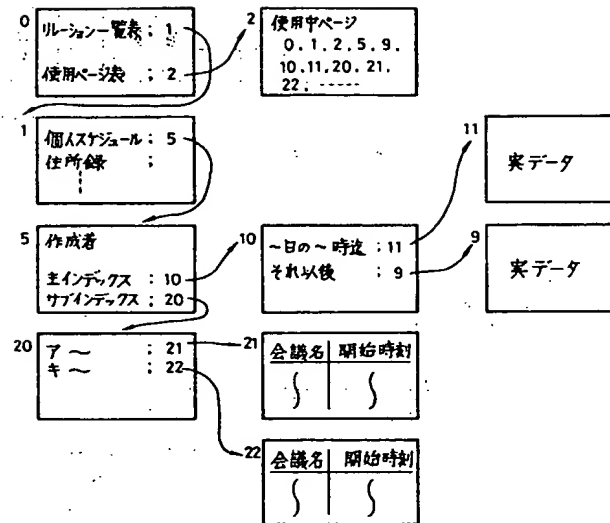
会議室名	開始時刻	終了時刻	会議名
------	------	------	-----

 リレーション名: 会議室予約
- (g) 

会議名	レベル	代表者	場所	開始時刻	終了時刻	出席者	資料
-----	-----	-----	----	------	------	-----	----

 リレーション名: 会議

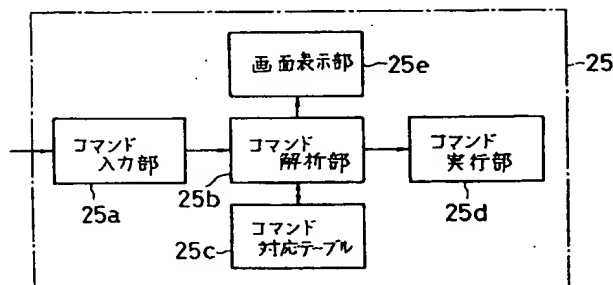
第 51 図



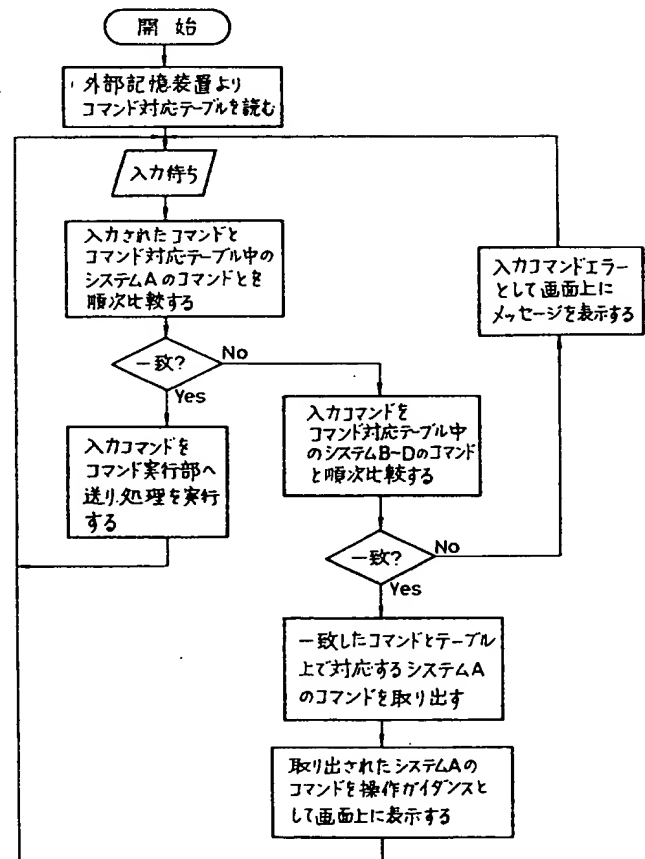
第 52 図

システム A	システム B	システム C	システム D	----
DELETE	DEL	ERASE	REMOVE	----
CATA	DIR	CLIST	CATLIST	----
CREATE	CRE	MAKEFL	NEWFILE	----
EDIT	ED	EDITFL	FILEED	----
COPY	COPY	COPY	FILECOPY	----
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

第 53 図



第 54 図



第 55 図

(a)

```

- ERASE ABC (入力行)
** DELETE ? (ガイド行)
- DELETE ABC (入力行)
    
```

(b)

```

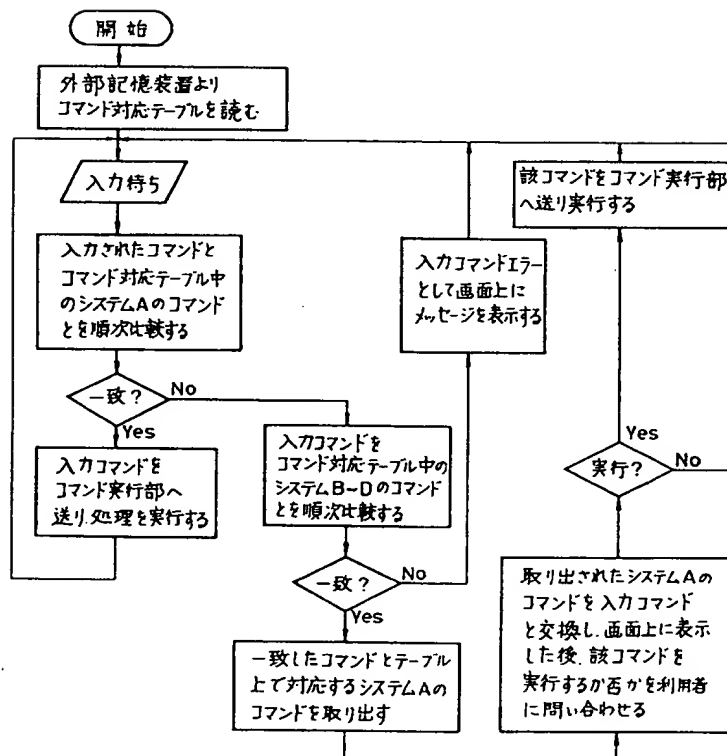
- DIR
** CATA ?
- CATA
** CATALOG LIST **
  AAA  BBC  CCC
  ABB  BLD  XYZ
  ⋮      ⋮      ⋮
    
```

第 56 図

```

- ERASE ABC
** DELETE ABC ? (Y/N)
- Y
** ABC DELETED
    
```

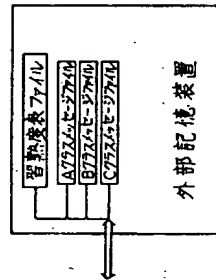
第 58 図



第 57 図

利用機能名	利用頻度	最終利用年月日	利用履歴を習熟クラスに利用履歴を記憶する	利用履歴を習熟クラスに利用履歴を記憶する
エディタ 基本機能	98	1983/12/15/07	B	B
エディタ 高級機能	---	---	A	A
フォント コンビタ	---	---	A	A
日本語文書処理システム 基本機能	---	---	B	---
日本語文書処理システム 高級機能	---	---	A	---
リスティング プリタ	---	---	A	---
リスティング プリタ	---	---	A	---
ファイル プリタ	---	---	A	---
電子メール	---	---	C	---
電子ファイル	---	---	B	---
OA Calc	---	---	---	---
文庫検索システム	---	---	---	---

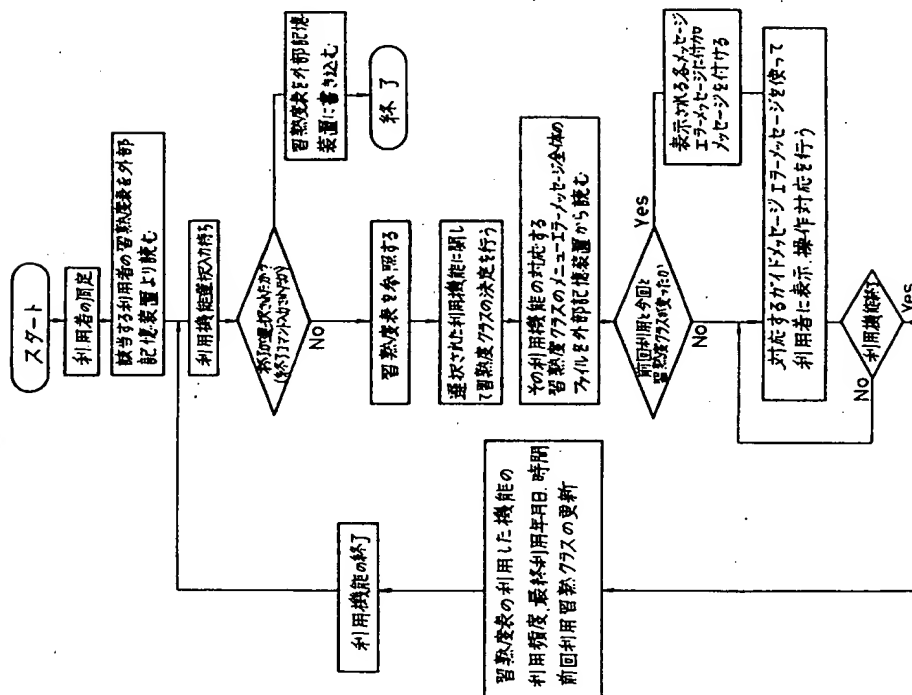
第 60 図



第 61 図

習熟度クラス	メッセージ
1 A → B	* あなたは十分に達したので、暗黙メニューに変わりました。
2 B → C	* あなたは習熟されたので進んだ機能が使えるメニューに変わりました。
3 C → B	* あなたは最近利用されていなかったので、中級クラスのメニューになりました。
4 B → A	* あなたは最近利用されていなかったので、半リブメニューになっています。

第 62 図



第 59 図

\*\*\* 作成したデータを  
ファイルに格納します。\*\*\*

データを入れる場所の名前を入れて下さい。  
まず装置名です。

装置名

装置名とは、あなたの日常使う格納装置  
の名前です。例えば [DKOO] で表します  
判らなければ、キーボードのキー-[F15]を押せば  
あなたの使っている装置名の候補が出ます。それ  
から選択して下さい。

---

・装置とは---ワークステーション 格納装置

・ファイルとは--- ファイル

・サブファイルとは--- サブファイル

第 63 図

\*\*\* 入力の方法が判らないようです。キーボードから DKOO を入力すると  
装置名の所に記入されます。修正したい場合は入力前に[修正]キー  
を押して下さい。なおキーボードのキー-[F15]を押すともっと便利です。

第 64 図

\*\*\* 作成したデータを  
ファイルに格納する\*\*\*

装置名

ファイル名

サブファイル名

有効期限

装置名は例えば [DKOO] のように英文字と  
数字の2桁ずつ表します。  
なお、あなたの使っている装置ファイル名の  
選択する場合は、キー-[F15] を押して  
選択して下さい。

第 65 図

\*\*\* 作成したデータの格納\*\*\*

装置名	ファイル名	サブファイル名	有効期限
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

なおデフォルトの値を利用されるのでしたらあ  
らかじめ[F14]キーでセットしておけば  
今後自動的に格納されます。この機能  
は便利です。

あなたのサブファイルの利用情報は次  
のようになっています。あと...%使用すると  
ファイルがオーバーします。

サブファイル名
<input type="text"/>

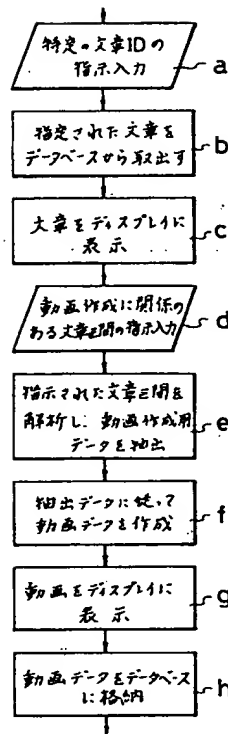
第 67 図

\*\*\* 装置名の入力が入っています。正しい装置名を入れて下さい。

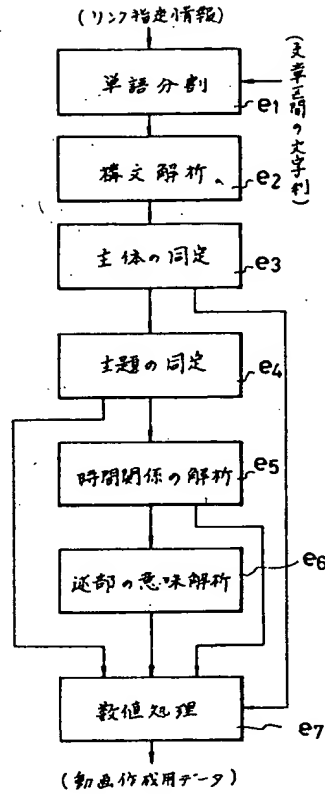
第 66 図

\*\*\* ファイル名記入誤り

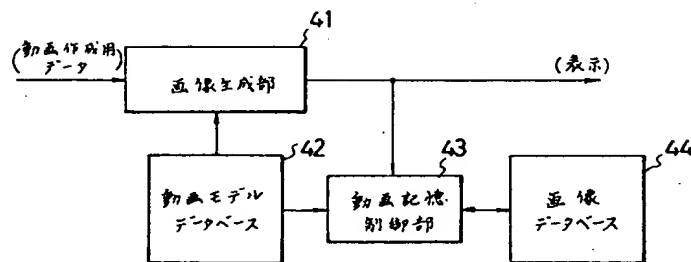
第 68 図



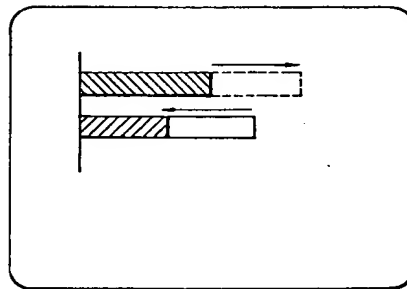
第 69 図



第 70 図



第 71 図



第 72 図